
M† Hunter

暁月 麗華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M†Hunter

【Nコード】

N1768S

【作者名】

暁月 麗華

【あらすじ】

『時雨教』 『クレディイス教』

突然出来たこの二つの宗教で、

分けられた平和な世界『セディアース』。

世界が平和だと思われていた裏で、

何故か毎日、クレディイス信者が人を殺していた。

クレディイス教が頭を悩ませる中で、時雨教の次期教祖に選ばれたのは、

宗教が大嫌いな金の亡者で
・
・
・
・
・

時雨の農村

約二十年前、

たくさんの方の街の住人が集まる中、二人の男が、街の高台で言い争っていた。

「私は神を信じる。神に己の何かを捧げれば願いを叶えてくれよう。

私は、声を捧げる。私は明日から二度と話さない」

一人は時雨千羅しぐれせんらという眉間の皺が目立つ少々歳をとった男。

明日というところが彼のなまけた性格が出ている。

「神など、この世には存在しない。ましてお前の様なステーキばかり食っているデブが神頼みなどして何になる。やり遂げたいことがあるなら自分で努力するべきだ」

もう一人はルーミィ・クレデイスという若い男。

この二人は昔から考えが合わず、こうしていつも喧嘩していた。

住人は重要な話だと言われて、呼び出されている。だが結局はこの結末。住人は、それを分かって来ている。

この二人の話は何故かいろいろと深く、共感するところがたくさんあるので、住人は来ているのだ。

いつもなら、言いたいだけ言って終わるのだが、今日だけはそうはいかなかった。

「いいことが思いついた」

ルーミィは両手を合わせて言った。

どうせくだらないことだろう、と言うように千羅は黙っている。

「私とお前が教祖になって、二つの宗教を創るのだ」

辺りがざわつく。

「宗教？そんなもの創ってどうする」

千羅は不信な顔をして言う。

「分かっているいな。宗教というものは、教えと信者がいてこそ出来るものだ」

「だから私たちがそれを創って何になるというのだ」

同じことしか言わない千羅。それを見て呆れたルーミィは住民たちを指差して、

「見ての通り、私やお前が何かを言うと、必ず誰かが心の中で共感するだろう？」

と言った。確かにそうかもしれない、と千羅は思う。

「だから私たちの争いに決着をつける為に宗教を創り、信者を増やすのだ」

「それで、勢力を強くしたら勝ちか」

「そうだ」

ルーミィは頷いて、住民たちに体を向ける。

「諸君！聞いていたな！これから私、ルーミィⅡクレデイスと時雨千羅は宗教を創始する！」

どつと歓声があがる。

「聞いての通り、私は神を信仰する！同感できる者は私のところだ！」

千羅が叫ぶ。半分程の住民が千羅に集まる。

「神なんてこの世に存在しない！」

今度はルーミィが叫ぶ。残りの住民は皆ルーミィの所に集まる。

「何だ。結局お前も宗教を創るのか」

「おもしろそうだからな」

この二人は仲が悪そうに見えて、一番の親友でもあった。

『時雨教』と『クレデイス教』は異常な速さで広まった。

二年前に大地震で三つの大陸に分かれた魔界^{セディアース}。

その住民たちを、この二つの宗教が分けた。この世界で宗教を信仰しない人間はいないだろう。

信者の数は時雨の方が上だ。

だが、時雨教は出来てからすぐに千羅が病死したために、教祖がい

ない状況に陥っている。

そのせいで今はクレディス信者が増えている。

早く次の教祖を選ばないと。時雨信者が散々焦った上で選ばれたのは千羅の一人息子。

だが、この息子は宗教に興味が無く、教えを一つも守らない。

千羅とルーミイの戦いは、ルーミイが勝つと思われていた。

そんな頃。

「母さん腹減った」

黒髪の青年が言った。彼の名は時雨^{しぐれ}ソラ。千羅の一人息子とは彼の事だ。

「・・・・・・・・」

母さんと呼ばれた女は黙っている。話せないのではなく、時雨教の教えを守って話さないのだ。

彼女は、時雨教の教えを全て守っている。だが、声を出さないままで守っているのはこの村だけで、他の時雨信者はその教えだけを守っていない。

もちろんソラはこうして話している時点で教えを守ってない。

「何もないじゃないか」

ソラは冷蔵庫を漁る。食材は何一つとして無い。

「畑の野菜はどうしたんだよ？こんなじゃ俺たちいつか飢え死にするよ？」

「・・・・・・・・」

母親は何も言わない。呆れたソラがキッチンを見回す。

「おっ？」

ふとソラは、写真の前に置いてあるものに目を向けた。できたてのステーキが乗った皿が、そこにあった。

「いいものあるじゃん」

皿の隣にはしっかりとフォークが置いてある。ソラはそれを手に取り、ステーキにフォークを立てようとした。すると、

「っ！」

黙っていた母親がソラの腕を押さえた。母親の身長はソラよりかなりと言っている程低いのに、なぜかものすごい威圧感を感じる。

「何。言いたいことがあるならはっきり言ってくれる？」

ソラが言うと、母親は無言のまま写真を指差した。写真は白黒だが、男が映っているのが分かる。

「このオヤジが何だって言うんだ」

写真の人物が誰か、ソラには分かっている。

この人物は、一年前時雨教を創始した時雨千羅その人だ。ソラは写真でしか千羅に会ったことがない。

知っているのは顔とステーキが好きということだけ。

「このステーキがお供え物とでも？」

母親が頷く。それを見たソラはフォークから手を離す。

「食べ物探しにちょっと畑に行ってみるよ」

そう言ってソラは扉を開けて外に出た。

秋の涼しい風が吹いている。人があまり感じない程の小さな小雨も降っている。そしてその中で薩摩芋を収穫する村人たち。

この自給自足の辺境『秋雨村』の名には丁度合っている風景だ。

収穫を手伝ったことが無いソラはふと思いついた。そういえばそろそろ薩摩芋の収穫期だった。

「野菜たくさんあるじゃん。どうして俺の家だけ野菜がないの？」

ソラは近くを通る若干老いた村人に聞いた。

「……」

やっぱり答えてくれない。

「あのさ」

村人は無言で通り過ぎて行った。無視をしているわけではない。聞こえていないわけでもない。話せないわけでもない。ただ、教えに沿って話さないのだ。

全部教えのせいなのだ。

なのに、無視された気分になったのは何故だ。

「くそつたれ。老衰で死ねよクソジイ」

ソラは軽く暴言を吐き捨てる。村人はそれでも何も言わなかった。

「ソラ兄ちゃん」

声とともによろよろと少年が歩み寄ってきた。少年の名はマナ。この村では最年少である五才の少年だ。

マナは昔から賢く、教えにも忠実で、村では将来が期待されている。そのせいか他の子供とは扱いがまるで違う。

ソラは、扱いがマナと比べて酷い他の子供たちにも、教えを守ることのできない愚か者という目で見られた。言葉が無いだけまだマシなのかもしれない。

それでもソラは、この村の全ての子供が嫌いだ。その中でもマナは、殺したくなるぐらい嫌いだ。

ソラが子供を嫌いな理由を一言で言うと、最近の餓鬼は生意気だからだ。

それにしてもどうしてこいつは今喋っているんだ。まさか教えを忘れたのか。

「この村のよいこは、話しちゃいけないんじゃないかっただけ？」

ソラは聞く。

「あっ！」

マナは驚いて口を塞ぐ。まさか本当に教えを忘れていたのか。

「はははっ」

その様子を見てソラは、肩を震わせて軽く笑った。お前、ただの馬鹿じゃねえの？と、言いたくなってきた。

今のマナを見て大人は、まだ幼いのだから仕方のないことだと思うだろう。だが、ソラぐらいの歳になると仕方のないじゃ済まされなくなる。

ソラは見てきた。今まで教えに反抗して喋った大人たちがこの村を

追い出されるのを。

秋雨村は山奥にあるため、食料無しで山を降りるのは不可能だ。なぜなら、

「こんな村出てってやるよ！俺は都市で生きるんだ！」

と言って去った村人も飢死したからだ。

この村には、教えを守らないと神の天罰が下ると言い伝えられている。それが、村の子供たちを黙らせているのかもしれない。

もちろんそれは、ソラにとってはこの村の最もくだらないことだが。

「よいこはお家に帰ったら？」

「・・・・・・」

「その件でお前のママが怒っても、その矛先はお前じゃなく確実に俺なんだから」

マナはきよんとしている。五才児にはちょっと難しい言葉を使いすぎたか。

それでも、マナは辺りを見回し、

「ちょっと聞いていい？」

と言ってきた。この村の人間は話したら駄目なんだろう。子供だってそれくらい教えられている。なのにマナは何を言いたいのか。何を考えているのか。言いたいことがあるなら紙にでも書けばいいだろう。どうしても言わないと伝わらないことなのか。

それが本当に分からない。これだから餓鬼はムカつくんだよ。ソラはそう思っただけで対処する。

「何？」

「どうしてしゃべるの？」

「教えというものの自体がうざったいからだ」

話すのは当たり前のことだと思い、ソラは適当に答えた。

「ソラ兄ちゃんにもうすぐかみさまのてんばつがくだるよ！」
マナはこちらを指差してきた。

「そう言うお前も今喋ってるんじゃないの？」

お互い退く気は微塵も無い。

「ぼくはいいんだ！だってソラ兄ちゃんに教えてあげてるんだもん！」

マナは語気を強くした。ついに苛ついたソラは

「うぜえぞ餓鬼。殺すぞ」

と、低い声で言った。殺すぞとは言っても、ソラは現在何も持っていないため、今すぐマナを殺すことはできない。殺るとしたら、暴力か。

冗談で言ったつもりでもなかったが、こんなことで人を殺す程ソラは短気ではない。何苛ついてるんだ。冷静になれ、俺。そう頭に言い聞かせるが、

「ぼくはソラ兄ちゃんなんかには殺されないよ！」

ソラ一人が冷静になったところで、マナの生意気さは変わらない。ソラ兄ちゃんなんかってなんだ。俺はなんかって言われるぐらい屑なのか。

「教えを守れないおろかもものにぼくを殺せるものか！」

「てことは今喋ってるてめえも愚か者だな？」

愚か者。五才の子供にこの言葉を言われるとは思わなかった。

「ソラ兄ちゃんはおろかものだ！」

マナはもう一度言った。するとどこからかこの村の子供が全員集まりだした。その数、約十。

「なんだてめえら？俺を殺すために集団暴行でもするってのか？」
子供たちは黙ってソラを睨みつける。

「————この目だ。『教えを守ることのできない愚か者』を見る目。それを今子供たちがソラに向けている。」

「みんな、準備はいい？」

マナが呼びかけると、他の子どもたちは同時に頷いた。

「まさか本当に俺を殺す気なのか？」

ソラが聞く。その質問を無視して、マナは息を吸う。

「せーのっ……おろかもーの！おろかもーの！」

突然何を言い出すのかと思ったら、よく幼児にあるあれか。

だが、『愚か者』なんて言葉は他の子供は知らないだろう。きっとそこで茫然として立ち尽くすに決まってる。

てことは、ここでマナは独り虚しくなる。やっぱり愚か者はお前なんだよ。はっ、ざまあみやがれ。ソラはこの後を軽く予想した。だが、

『おろかもゝの！』

『おろかもゝの！』

子供たちはマナの真似をしてソラに迫ってきた。おそらくマナ以外の子供たちは愚か者の意味も分かっていないだろう。だが、この子どもたちは親にマナを見習えと言われている。だから、マナに便乗しているのだ。

「ソラ兄ちゃんはおろかもゝの！」

『そらにいちちゃんはおろかもゝの！』

子供たちの声が村に響く。なんてうるさいんだ。ソラはあまりの音量に何も言えなくなった。子供の声なんて初めて聞いたが、思った以上に生意気な声だ。聞く価値などないくらいに。

普通の都会の人間からすれば子供の声なんて普通に聞けるものだ。

ソラはそんな都会に行ったら耐えられないかもしれない。

その前に、この静かな村では話声も簡単に聞こえてしまうことをソラは思いだした。なのにこれだけ音量があったらどうなるか。

ここから先はソラの思った通りに進むことになるのは、子供たちも思っていなかっただろう。

時雨の農村（後書き）

この話は、前作Darkness Empireの二年後の世界を舞台にしています。

……ですが、話に関連性は全くと言っていい程ありません（笑）

たまに前のキャラが出てきたりするだけですなw^；

題名『M† Hunter』ですが、『エムクロスハンター』と読めます。

Mはお金、†は宗教を意味しています。

†をTにすると『マウンテンハンター』になるので要注意（笑）

次話は『母親の反抗』です。

母親の反抗

ソラが愚か者と言われてすぐのことだった。

「まっママ！」

と、マナが言うと同時に子供たちが大人しくなった。小さく嫌な予感を感じつつ、ソラはゆっくり後ろを振り向く。

そこに立っていたのは十人の女。全員子供たちの母親だ。

「・・・・・・・・」

母たちは無言で子供を睨みつけている。

その中で一番偉そうなマナの母、バーニアがマナに近付く。

母親の顔は悲しみに満ちている。何故話しているの？とでも言うように、無言の圧力をマナにかける。

「ママ！これは・・・・・・・・っ！違うんだ！」

マナは必死に誤魔化する。

「・・・・・・・・」

「それもこれも全部・・・・・・・・！」

無言を貫く母の前に、怯んだマナは言葉を詰まらせる。マナは、全部僕のせいだと言えないまま、俯いてしまう。

バーニアは、まるで全てを理解したように頷いた。この後どうせ無言でマナを連れて帰るんだろう。どうせ怒りの矛先は俺なんだろう。とソラはバーニアを軽く軽蔑したような目で見る。

すると、バーニアが突然、

「ソラのせいなのでしょう？」

と言った。

「え」

突然バーニアが喋ったのでソラは目を開いて固まる。今まで、何をしても何を言っても話さなかったのに。どうして今この瞬間に喋る。ソラを驚かせたのはそれだけではなかった。

「ねえマナ、それもこれも全部ソラのせいなのでしょう？」

「どうして黙っているの？」

バーニアだけにとどまらず、次々に他の母親が喋りだした。ソラは、今何が起きているのか分からなくなってきた。

母親たちに囲まれたマナはありえない光景を目にした顔をして、黙り込んだ。

ソラがこの母親たちが突然喋りだしたのに驚いている様に、マナも驚いているのだ。今まで一度も喋ることが無かった母親たちが突然喋りだすのだから当然のことだろう。

固まったマナを見たバーニアは勝ち誇ったような顔をして口を開く。

「どうやら凶星のようね？マナ？」

一体何がどうなっているんだ。普通にみんなが喋っている。どうして。今まであんなに教えを尊重してきたのに。

ソラが驚いて呆然としてしていると、今度はバーニアの視線がソラに向けられた。

「じゃああなたに聞くわ。マナたちに変な事を教えたのはあなたなのでしょう？」

「えっ俺は……」

はつきり言えば、ソラはマナたちに多少の暴言は吐いたが、先に話しかけてきたのはマナだ。なのに、バーニアからは先程のソラの母親と似たような威圧感が感じられるのだ。

「あらあら〜いつもの生意気さがないわねえ、時雨の次期教祖様？」
バーニアは上から目線でソラに言った。

「あのさ、俺は教祖になんてなりたくないんだけど」
緊張感のない軽い口調でソラはバーニアに微笑を返す。

「折角千羅様の息子として産まれたのに、本当にあなたは残念な男よねえ」

ねえ、とバーニアが同意を求めると、

「教えを一つも守れないし」

「四六時中お金のことを考えてるし」

他の母親たちがソラに近付いてきて、これまでの怒りと共に次々に

不満を口にする。

「普段は大人しいのに、ちょっと怒らせたらムカつくぐらい毒舌を吐くしねえ」

「私さっき見たのよ。この人、私のおじいちゃんに死ねとか言ってたのよ」

「そうそう。こういうのって二重人格って言うんだっけ？」

散々言われて、ソラは今まで自分がやってきたことを思い出した。まず、物心がついた頃から教える気は全く無かった。話す度、自分の口に母親の人差し指をつけられて喋るなど無言で教えられた。だがそれでもソラが嫌がったために、母親は諦めてしまったらしく、何時の間にもやら話しても人差し指をつけられなくなった。

この時から、もうバーニアたちに呆れられていたのかもしれない。さらに、ソラにはこんな田舎生活を抜け出して金持ちになって贅沢に暮らすという野望もあった。

その野望が出来たのはソラがまだマナと同じ五歳の頃だ。

ここセディアースでは共通通貨として『マリア(M)』が用いられる。もちろん自給自足のこの村にお金は必要ない。

野望を燃やす一年前、ソラは母親が持っていたマリア札を初めて見た。母にお金について聞くと、反応すらなかった。

そんなに危ない物なのかと思ったソラは、その後すぐお金の使い方について勉強した。分かったのは、お金は欲しい物を買う為にあるものだということだ。

それが分かった後、幼いソラは母親にこう宣言した。

「僕、将来大金持ちになって贅沢するんだ！」

これを聞いた母は、目の前で泣いた。

ソラは今更になって気付いた。自分は幼い頃から腐った人間だった。時雨教次期教祖としての正しい道を簡単に踏み外しているのだ。

今思えば、バーニアや他の母親に『残念な男』と言われ、マナに『愚か者』と言われるのは普通のことだった。

「あなたに時雨教次期教祖の荷は重すぎるわ。だって正しい道を進

めていないのだもの」

バーニアはしつこいぐらい言ってくる。

「は？」

ソラは一瞬自分がバーニアに殺意を向けた様な気がした。

正しい道？それがどうした。

正しい道を歩んで何になる。何の得になる。

正しい道を踏み外したのなら、人間の道だって踏み外したって構わねえよ。

今ソラがナイフなどの凶器を持っていたなら、マナたち餓鬼と一緒にバーニアも殺していただろう。

「本当可哀そうよね」

「黙れ」

「可哀そう」

全く聞こえていない様に母親たちはソラを憐れむ。

今のソラは何も持っていない。だがらできるのは、

「黙れつつってんだよ。全く、カスどもの分際でくだらねえことで騒ぎやがって」

毒舌を吐くこと。

「出たわ、二重人格！」

「ほんと。大人しい性格と最低な性格の両方があるなんていや〜ね」

母親たちはソラを気持ち悪い物を見る目で見てくる。

「だからなんだって言うんだ？てめえらカスの言うことを、俺が素直に受け止めるとでも思っているのか？」

「カスって……！！」

「本当にこの村の人間って馬鹿で愚かだよな。最初に、俺のことを残念な男とか言った奴はどこのどいつだ？愚か者とか言った奴もいるよな？」

先程の仕返しをする様に、ソラはマナたちと母親たち全員を愚か者を見る目で見下した。口は完全に悪人の顔に歪んでいて、さっきま

で愚か者と言われて困った顔をしていた人間だとは誰も信じないぐらいだ。

「大体、こうやって話している俺が愚かならてめえらも愚かなんだぞ？」

教えとか守っても無駄。お前らも結局は話したくなって今話してんだろ？みんな俺と同じなんだよ。ただ愚かになる日が俺の方が何年も早かったってわけだ」

と言って、ソラが横目でマナを睨みつけると、マナは脅えてバーニアの後ろに隠れる。

「従わなければいけないこと全てを完璧に従うことができない愚かな生き物。それが人間だ」

「何を、言ってるの？」

泣きだしたマナを抱きしめて、バーニアはソラに言い返す。

「人間は全員愚かだから、昔からみんなで協力とか馬鹿げたこと言っ、何時まで経っても進歩しない存在となってるんだよ」

「やめて！」

「本当に人間って……」

「もうやめて！」

マナが泣きながら叫ぶ。それでもソラは止まらず喋る。

「馬鹿だよな？」

辺りが静まりかえった。バーニアが反抗的な目でこちらを睨みつける。それに対しソラは微笑を浮かべて全員を見下す。この村でソラ以上に身長が高い人間はいないが、今までより格段に全員が小さく見える。

もしマナたち子供が人間の目に入らない程小さなダニだとしたら、バーニアたち母親が人間に踏み潰される、ダニより少し大きい蟻。そして自分は何百倍も大きい人間。

「愚かさで言えば、この世界の中で人間が一番マシだ。だって動物はみんな馬鹿だしな」

「あなた、何様のつもり!？」

バーニアが語気を強めて言う。

「俺は人間だ。さっき言っただろ？俺はお前らより何年も早く愚かになってるって」

バーニアの眉間に皺ができている。これは完全に怒っているのだ。

「じゃあ神にでもなるつもり？」

「神？そんな空想の人物になろうとしている奴なんか、動物より愚かだな。第一、神なんてこの世に存在するわけないだろ？」

「時雨教にもあったでしょう。神は必ずいるのよ」

「あんなステーキ好きのデブの言うことなんて聞くだけでも馬鹿らしいな。大体宗教という存在そのものが消え失せるべきだ」

と、ソラが言うと返す言葉が無くなったバーニアは黙り込んだ。

「……ソラ兄ちゃん」

黙り込んだバーニアの後ろからマナが顔を出す。

「僕、ソラ兄ちゃんを見直したよ」

「それは悪い意味か？」

「兄ちゃんは最悪だよ！最低！」

そう言って、マナは子供たち全員を引き連れて家に帰っていった。

「あいつらは所詮ダニか」

マナたちが去った後ソラがバーニアに言うと、

「何故、突然私たちが喋り出したか知りたいかしら？」

意外な返答が返ってきた。確かに最初はソラも気になっていたが、今じゃどうでもいい話だ。

「私たちはね、千羅様が亡くなる前の抽選で選ばれてここに住んでるの」

「抽選？」

「当選したら、秋雨村に住み着いて『次期教祖時雨ソラ』を育てる権利が与えられるのよ」

「……はあ？」

「この当選を信者の誰もが望んだのよ。だって、自分が育てた人が世界で活躍するのよ」

バーニアの言っていることが理解できない。いつのまにかソラの顔には微笑が消えている。この村に住んでいる人間が皆抽選で選ばれている？意味不明だ。

「時雨教を片っ端から叩き込むために、私たちは一度も話そうと思わなかったわ。でもね、あなたは教えを守らないし、人を怒らせてばかり。あなたが二十歳を超えた今じゃ私たちがいくら話さなくても変わらないから」

「もう止めたってのか？」

「ええそうよ。だからね、今日母親みんな集めて、もう止めようって話してたらマナたちの声が聞こえたの」

バーニアと、後ろにいる他の母親たちの視線が恐ろしいほどに冷たい。

「当選して最初は嬉しかったし、あなたが五歳になるまでは幸せだったわ。でもあなたは最低の人間の道を歩んでいた。だからこの当選にすごい後悔してる」

「だから？」

「これから私たちはあなたの家に食料を送らないし、生活に必要な物資も送らないわ。自分一人で生きていきなさいよ」

「はっ？ふざけんなよ！」

ソラは怒ってバーニアに近づくが、バーニアはそれを避けてこちら背を向ける。

「さようなら。憐れな人」

「あなたが五歳になるまでの間だけ幸せだったわ」
全員がこちらに背を向け歩き去っていく。

「おい！待てよ！」

気づいた時には、ソラは独りで畑の前に立っていた。

英雄の物語

「・・・・・・・・ただいま」

ソラが家に帰ると、母親が机で何かを一生懸命書いている。野菜を貰うために先程外に出たはずのソラは、何も持っていない。母が反応すらしなないということは、最初からこうなることが予想できていたのだろうか。

この光景を見た途端にソラは母、時雨リリカに負けた気がした。そう思うと悔しい。だが、もう面倒臭いので怒ったり暴言を吐くつもりはない。

「何書いてるの？」

そう言っソラは机に近づき、母の書いている物を上から覗く。そこには、一冊のノートと、古い新聞が巻かれた分厚い本があるだけで他には何もない。よく見るとノートに何やら小説の様なものを書いてある。

「何、これ」

「・・・・・・・・」

リリカは黙って書き続けている。やっぱり他の母親が喋ってもこいつだけは喋らないのか。ソラはノートに顔を近づける。ノートの上の辺りに普通の文字より少し大きめに題名が書いてある。

「セディアース戦記？」

ソラが言う通りリリカは静かに頷いた。『セディアース戦記』という題名がつけられたノートは、リリカが随分前から書いていたらしく、ページ数はかなりある。

「じゃあこの本は何？」

本には、ブックカバーの代わりに何年も前の古い新聞が巻かれている。そんな事は気にせず、横に置いてある分厚い本にソラが手を伸ばす。

「っ！」

理李香はそれを見たら駄目だと言う様に勢いよく立ち上がった。だが、ソラはすでに表紙をめくっている。表紙をめくると、ほとんど黄ばんでいない紙が顔を出す。

「・・・・・・・・ん？」

本の題名は『Darkness Empire』、著者は『エリア
II マリン』というらしい。

「こんなの家にあったっけ？」

そう聞くと、リリカは諦めたのか黙って椅子に座る。ソラは、村での暇つぶしによく家にある本を読んでいたが、こんな本は初めて見た。

ソラは表紙が気になって古い新聞を取る。一言で言うところ暗黒を思わせる色で描かれたその表紙。一番前にツインテールの少女が涙を零して笑っている。そしてそのすぐ後ろに横を向いた藍色の髪の女性が立っている。女性は笑っていない。

本を指差してソラは聞く。

「これってセディアースでは有名なわけ？」

リリカは頷いた。

「へえ・・・・・・・・」

やっぱり俺って世間知らずだな。ソラはそう思って再び本に目を移す。すると、気になるものが目に飛び込んできた。

女二人のかなり後ろに茶髪の男性が描かれている。男性は体中血だらけなのに、大量の血が付いた剣を持っていて、顔は笑っている。その表情は、先程ソラが浮かべた悪人顔というものに似ていた。

ああ、よく物語にある悪役か。悪役がいないとスリルがないしね。

ソラは勝手に理解しつつも聞く。

「じゃあこの女二人が正義で、こいつが悪？」

「違うわ」

「えっ!？」

今度はリリカまでもが喋った。一体、この村に何が起きているのだろう。まさか、所詮リリカもあのバーニアと同類だったのか。呆

れたソラは母親に向けていた、バーニアとは違うという小さな期待を一瞬で頭から抹消した。

「ソラ、この人がいなかったらあなたは今頃死んでいたかもしれないわ」

「どういうこと？」

「この人はね、セディアースだけじゃなく、全ての人類をある男の野望から守ったのよ」

ソラはその人やらある男やら何が何だか分からなくなった。きっとリリカは空想しているだけなんだ。この空想の人物が俺に関係するわけない。

「あのさ、母さん」

「何かしら？」

「勝手に空想世界に俺を出さないでくれる」

「空想？何を言ってるの？この話は実際にあったことなのよ？」

「はあ・・・母さんの頭、重傷なんじゃないの」

「違うわ。いい？説明するわよ」

そう言ってリリカはツインテールの少女を指差した。

「この子は、ある帝国の皇女なの。要するに、この話を書いたのもこの子」

ソラはパツとしない顔で、リリカの指の動きを見つめる。次に、リリカの指はゆっくり藍色の髪的女性へ移動した。

「この女性はその帝国の女帝。この本の著者の姉よ」

「ふーん・・・で、この悪人は？」

ソラは悪人顔をした男性が気になって、リリカの指より先に表紙に指を滑らせる。

「悪人じゃない。この人は、普通の家に産まれたわ。でもちよつと違うのよ」

「人を殺したとか？」

「もう！そんなことばかり言って！」

リリカはソラの頬を右手で平手打ちした。だが、人を殺してないの

にどうしてこんな血だらけで悪人顔しているんだ。考える間も無く
リリカが言う。

「この人はね、神様の末裔なのよ」

「はあ!？」

だから神なんて存在しないに決まってるだろ。この時雨教中毒っ・
・妻だし当たり前か。

「この話は著者目線だから、あの事件で一番活躍した彼については
ほとんど書かれていないわ」

「事件？」

「ああ、その事件については置いておいて。えっと・・・・
から私はね、彼についてのお話を書くことにしたのよ」

リリカはそう言ってまたノートを書き始める。

「あのさ、なんで母さんが喋ってるわけ？」

本当はリリカが話し始めた頃に聞くべきだったことをソラは聞いた。

「さっきバーニアさんが来て、もう話してもいいって言ったのよ」

リリカはあっさり答えた。

「まさか、それだけで？」

「ええ」

結局はリリカも話したくなってあっさり宗教を裏切った。人間とい
うものはそういうものなのか。人間が話さないで生きるなんて無理
だ。

「ソラ、このノートができたら読みなさい」

「何で」

「あなたはこの男性に会わないといけないのよ」

「何で俺がこの悪人面と会わないといけないんだ？」

「・・・・・」

「無視？」

リリカは黙ってノートを書く。もうこれ以上何か言っても無駄か。
そう思ったソラは自分の腹が鳴ったことに気づいた。

「腹減ったなあ」

横目で千羅の写真がある机を見ると、ステーキはまだ置いてある。

「ねえ、こんなところに放置したら腐るよ」

「そんなにステーキが欲しいの？」

「この村で肉は滅多に食べられないんだよ？このまま捨てるなんてもったいない」

「じゃあ暖炉で温めて食べたらいいじゃない。最も、食べていいものじゃないけど」

「へえ、いいんだ」

意外にリリカが許可してくれたので、すぐにソラはステーキの乗った皿を暖炉の上に置いた。置いてすぐに、おいしそうな匂いが部屋中に広がる。肉料理をほとんど経験したことがないソラは、ステーキを楽しみにしていた。

「でも、そのステーキ作ったの一ヶ月前よ。食べたらお腹壊すわよ」今のソラには、母親の重要な忠告すらも聞こえない。

「いただきます」

そして、そのまま一ヶ月前のステーキを口に運ぶ。

「ねえ、母さん……ステーキってこんな変な味がするの？」

気づいた時には、腹が変な音と同時に悲鳴を上げていた。

「くそ……」

その日の夜、ソラは腹を押さえて自分の部屋のベッドにもたれていた。顔は死にかかっているが、命に別状はないと思うと、あの時母は言った。もう腹の痛みは治りかけていたが、それでも母が憎らしくなってきた。

「あのババア！俺になんて物食わせるんだ！」

叫んでも叫びに満たない声しか出ない。

「ソラ兄ちゃん？」

ふと、窓際からマナの憎らしい声が聞こえた。ソラは、這い上がるようにして立ち上がると、窓を開ける。そこにいたのはマナ一人だ

った。

「ちっ、何だよ」

ソラは舌打ちしてマナを馬鹿を見る目で見る。マナの瞳に涙が浮かんでいる。

「えっと……あのね」

「まさか謝りに来たのか？今更謝ってもお前みたいな馬鹿なダニを許す気なんてねえぞ」

「ごめんねを言いに来たんだ」

やっぱり餓鬼はワンパターンだ。今まで読んできた本にもあったのだ。幼児が悪いことをしたら、いつも決まった台詞で丸く収まる。

『ごめんね』

『いいよ。また遊ぼう』

この二つだ。幼児の反省はこれが何度も何度も繰り返される。

しかも、ごめんねを言う側は決まって泣く。泣くならそんなことすんじゃねえよ。それどころか、謝られた側もよく泣く。お前は何もしてねえ被害者だろ。

特に、本当に小さい餓鬼はこの言葉を無駄に間延びさせるので、本当に反省しているように聞こえない。それがソラにとっては苛つきに変わるのだ。だから、ソラはこの二つの台詞を見つけた時点でその本を止める。

こんな幼児の成長の一つに苛ついている自分もやはり愚かだ。だが、止めた本の中には帯に『百万人が泣いた！』と書いてあるものもあった。こんな場面を見て泣けるか。泣く百万人の人間は、俺よりも愚かだ。

そして、マナが言った言葉もやはり、

「ごーめーんーね」

これだった。この言葉。この間延び。この涙。ソラは苛ついて再び舌打ちした。

「ごーめーんーね」

ほんの少しの間を置いてマナはまた言った。涙が溢れ出て、顔がく

しゃくしゃになっっている。

「何回も謝れば許すとも思っているのか？」

「うん」

「……………馬鹿じゃねえの」

俺は大人げないことばかり言っているが大人だ。マナのような餓鬼ではない。

「ママに内緒だけどぼく、ソラ兄ちゃんに食べ物持ってきたんだ。食べてくれる？」

マナは、手に持っていた籠をソラに見せる。

「帰れ」

籠に目も向けず、ソラは窓に手を掛ける。

「えっ？」

「家に帰れ」

「でもぼくはソラ兄ちゃんのことを！」

「うっせえよ。さっさと帰らねえと殺すぞ」

ここまで言うのと、マナはしょんぼりとした顔で帰っていった。だが、籠は窓際に置いたままだ。

「何なんだよこれ」

ソラは籠を机の上に置き、中の包み紙を開く。中に入ったのは今日収穫したばかりの、薩摩芋を焼いた焼き芋が、一つだけ入っていた。丁度ステーキの口直しに何か食べたいと思っていたところだが、まさかこんな形で焼き芋が食べられるとは思わなかった。

「バーニアの手製か……………まずかったら殺しに行くぞ」

思い切って焼き芋に噛り付く。一瞬のうちに甘い味が口の中に広がる。

「……………これ、うめえな」

ソラは小さく呟いた。マナには感謝していないが、焼き芋は何故か驚くほどにおいしかった。

黄金の武器

朝日が眩しい。昨日はしつこいほどの時雨が振っていたが、今日は晴れた暁天が広がっている。

そんな日にソラは部屋に一人立て籠もって紙に絵を書いていた。

「ここを長くした方が切れ味が良くなるかな？」

ソラが書いているものは絵というより設計図というものだ。だが、絵というものに全く縁が無いソラが書いたものは、ただの幼児の落書きにも過ぎない。

「いや、こんなものじゃ駄目か」

他の人から見れば、気持ち悪い物体にしか見えない程、下手なこの絵。そんな絵に、ソラは丸い物体を書き足していくも、よく分からない物が出来ていくばかりだ。

「何か違うんだよなあ」

さすがに自分の下手さを理解したのか、ソラは頭をかく。自分は絵が下手だ。そう思いつつも丸い物体を増やす。

「よし、出来た」

ソラは紙を頭上に掲げる。

「何だこれ」

そしてすぐに呟いた。

案の定、余計に気持ち悪い物体が完成した。ソラは黙ってそれをしばらく見つめる。紙にあるのは、うねうねした蛇の様な物だ。最初は上手くいっていると思っていたが、これは失敗だ。苛々してきたソラはすぐに、

「くそっ！」

紙をくしゃくしゃにして窓から外に放り投げた。

「どうして俺だけこんなに下手なんだ！」

ソラの勝手な想像だが、両親はきっと絵の才能がある。千羅は、ステーキを食いまくるただのデブにしか見えないが、あれでも結婚前

は画家をやっていた。その妻であるリリカも絵が得意で、昨日ノートに書いていた『セディアース戦記』も挿し絵は自分で描いているらしい。最も、ソラは二人の絵を一度も見たことがなかったが。

「こんなの武器じゃない」

この絵を見る限りとてもそうには見えなかったが、ソラは一応武器を設計していた。今まで家で読んだ本の中で一番格好いいと思った、先に鎌がついた鞭を鎖鎌の様な物を頭に浮かべて考えていた。それも、物凄い長さの物を。

その目的はもちろん、将来のためだ。このセディアースで金持ちになるためには、戦いは付き物だろう。

武器は何も持たないよりも大幅に戦いを有利にする。

そう考えてソラは武器を設計していたものの、絵の才能が無さ過ぎて変な物体しか描けなかった。

「こんなもの描くより作った方が早い」

椅子から立ち上がったソラは部屋から出る。扉を開けた先には狭いキッチンとリビングが広がっている。一瞬、昨日腹を壊したという嫌な思い出が頭に蘇った。

だが、そんなことよりも気にかかることが一つあった。

「あいつどこいったんだ？」

リリカがいない。彼女はいつもここにいた。余程のことが起こらない限りは大抵ここに座って本を読んでいるはずなのに。

不審なことがあるものだ。ソラは思いつつも、家に武器の材料がないかと漁る。確かこの家には千羅が鎖の絵を描く時に使っていた長い鎖と、昔リリカがこの村で作物を育てるためにバーニアから貰った鎌があったはず。それがあれば、頭の中で出来ている武器が出来るのだ。

「でーきたっ」

二つとも案外簡単に見つかった。時間は十分もかからなかった。しかも、鎖の先の形が少しだけ変形していたせいか、繋げるのも楽

だった。こんなに楽に作れる武器でいいのだろうか。まあ運がいいのはいいことだ。

それにしても、この鎌は変な色をしている。金色と呼ぶには少し足りない、黄色と呼ぶにはもったいないというような色だ。

それに、形も変だ。この鎌には持ち手が無い。雑草を刈るには使いにくいだろう。だが、持ち手が無いのは外れたとかそういうものはなさそうだ。だが、武器として扱うのなら都合はいい。

ソラは、色を見てこの武器に『バナナ』という名前をつけた。

早速威力を試したいところだが、実験という理由でこの村の人間を殺すのにはなぜか気が進まない。今日は振り回すだけにして、少しでも慣れてみようか。

リリカがいらないことは完全に忘れてソラは鎖鎌『バナナ』を持ったまま外に出た。

遠くでバーニアと他の母親が話しているのが聞こえる。

「みんな普通に話すようになったわね」

「まあ、話さないだけがこの時雨教ではないから」

「そうそう。でも私、ソラが次期教祖に選ばれるのだけは気に食わないわ」

「じゃあソラが時雨教祖になったら、バーニアさんまさかクレディス教に行くの？」

「クレディス教？嫌よ。だって一日に人を何人も殺してるそうじゃない。なのにどうして信者が減らないのか不思議でたまらないわ。逃げたら殺すとか言って強迫でもしてるのかしら」

「そうよね。でも今時雨には教祖がいなし、早く次の教祖を選ばないと」

生憎、こつちも教祖になるつもりなんてないんでね。この機会にバーニアを武器の威力を試す実験体にしようか。そう思ったが、
「やめよう」

ソラは今頭の中で出来ていたバーニア殺人計画を諦めた。だが、こ

れは今後バーニアを殺さないわけではない。あいつを殺すのは本当にあいつが邪魔な時だ。なぜなら、その時はおそらく近いうちに来ると確信できるからだ。それだけバーニアの存在は憎たらしい。

「クレデイス教か……」

「まああっちの教えにも少しだけ共感できるんだけど。バーニアさんの言う様に物騒だわ」

バーニアより憎たらしいものを、ソラはひとつだけ思い出した。それはクレデイス教。

クレデイス教は、時雨教の敵。教えははっきり言って間逆だ。時雨教の敵はソラの敵ということにもなるが、ソラは時雨教とは関係なくクレデイス教が嫌いだ。

クレデイス教は、平等を意識する時雨教とは全く違う。教祖ルミィが全てを仕切り、その下に次期教祖

のセルシー、その下に幹部、とまだまだ続く。普通のクレデイス教信者はそのかなり下になる。

勿論この情報は時雨次期教祖であるソラや秋雨村の人間だけが知っていることであり、一般の人間には一切知らされていない。表でクレデイス教は、神頼みするよりも努力をしろと嘘を言っている。だから何も知らない信者が増えるのだ。

「クレデイス教。いつか俺が絶対潰しに行くからな」

ソラは一言呟くと、鎖鎌をその場で振り回す。鎖鎌の長さはソラの身長百七十五センチメートルを軽く越している。振り回すのにはかなり力がある。それに一回回すだけで強い風がソラに当たるので、漆黒のような色をした髪はすぐぼさぼさになる。

さらに、この武器には欠点があった。

「うわっ」

振り回すのをその場で止めると、その時によっては鎌が頭上に落ちてくる。今はソラの足元に落ちたからよかったが、運が悪ければ刺さってあの世行きだ。

やっぱり、もう少し使い慣れる必要がある。ため息をついたソラは

鎖鎌を小さくまとめて上着の中にある内ポケットに入れた。すると、

「ソラ、何をしているの」

声と共にバーニアがやって来た。この雰囲気からしてバーニアは鎖鎌を見ていないのだろう。

「そっちこそ、何の用」

「昨日とは随分違うわねえ？またゴミとか言われるかと思ったわ」
バーニアは挑発するように言った。

「ゴミって言って欲しいわけ？マゾヒストだね」

ソラは挑発を挑発で返す。だがバーニアは怒らず静かにソラを睨みつける。

「やはりあなたはあの人に会う必要があるわ」

「あの人？」

「あなたのお母さんが書いている話の主人公よ」

リリカが書いている話の主人公、要するにあの悪人面。

「どうして会わないといけないんだ？」

ソラが聞くと、バーニアは答えずにこちらに背を向けて去っていく。

「……自分で考えなさい」

「はあ？」

どうしてあの悪人面と会わないといけないのだろう。ソラにはそれが分からなかった。

その頃、クレディス教の本拠地ティアーマインド神殿では、一日一回のクレディス教の唱和が行われていた。

「卑怯は、神を意味する」

「外道は、神を意味する」

「裏切りは、神を意味する」

「教祖ルーミィクレディスは、神を意味する」

「時雨教は、塵を意味する」

唱和が終わると、ルーミィが台に立つ。それと同時に信者全員が跪

く。

「今日するべきことはなんだ」

と、ルーミィが聞くと返ってくる答えは一つ。

「卑怯に努めます」

こうしてクレディス教信者が神殿から出て、一日が始まる。この神殿のいつもの風景だ。

「のう、セルシーよ。今日も成果無しに終わってしまうのか？」

信者が全員いなくなったのを確認したルーミィは、台の下にいる赤マントの男セルシーに言った。

「大丈夫です父上。今日こそ、『時雨教次期教祖時雨ソラ』の居場所が分かるはずですから」

冷静な返事が返ってくると、ルーミィは笑う。

「はっはっは。お前がそう言う時はいつも私の期待に答えてくれたな」

「当然です」

「時雨教が潰れる日がとても楽しみだ」

セルシーは勝利を確信したような笑みをルーミィに見せる。すると、一人の幹部が神殿に入ってきた。

「教祖様」

「どうしたのだ」

「時雨ソラの居場所を知っているという女が神殿に来たのですが」

「何？」

「………通しますか？」

「通せ」

ルーミィが言うと同時に、神殿の門から一人の女が入ってきた。服装は麻で作られた貧相なものだ。

「貧乏そうな女だな」

「いえ。この世の金持ちはルーミィ様だけですから」

女は得意げに答えた。これには、ルーミィも少し興味を持ち、

「で、時雨ソラはどこにいる」

と期待して聞く。

「クレイエル帝国の北、ルキアビッツ山脈の奥にある秋雨村です。場所は私が案内します」

「なんと・・・・・・」

セルシーは驚いてルーミイを見上げる。上にいるルーミイは喜びに満ちた表情で笑っている。

「よくぞ教えてくれた。そなたには後に褒美を差し上げよう」

「ありがとうございます」

「名は何という」

「私は時雨ソラの母親、時雨リリカと申します」

「ほう？」

裏切りとは神だとルーミイはいつも言っていた。千羅の妻が裏切るのは世界をも変えてしまいうだろうに。

そう思うと同時に、リリカが補足するように言う。

「それと、ソラに『彼』を探せと伝えておきました」

「何、そこまでやってくれたか。気が利く女だ。これで我々が、奴に『彼』を探せと言う必要が無くなった。礼を言うぞ」

『彼』。セルシーにはこれが誰だか分かっている。現在行方が分かっていないとされている男。

その存在は、現在クレデイス教がソラの次に重要としているもの。

それだけ危険な存在だ。

千羅もまた、『彼』を探していた。

ルーミイはこの存在をソラに探してもらうことにより、クレデイス教は時雨教を上回るのにかなり有利になれると考えている。

それでも、セルシーがこの光景に小さな不安を感じているので、ルーミイはわざとらしく嬉しそうな顔を向ける。

「聞いたかセルシー。明日にでも、秋雨村を襲撃するぞ」

「明日ですか!？」

「どうした？」

「いえ、何でも」

「とにかく幹部を集めろ。作戦会議を開く。だが、幹部たちに伝えておけ」

「何ですか」

「殺すのは邪魔な村人だけだ。時雨ソラは殺すな。奴はあくまで放し飼いだ」

「・・・・・・はい」

セルシーは不満そうな顔を一瞬リリカに見せると、奥にある会議室に向かって走り出した。こんなことがあって本当にいいのだろうか。僕は夢を見ているのだろうか。だが、現にリリカはこの神殿に来て、自分の息子であるソラを裏切ったのだ。これは夢ではない。

いくら母親でも裏切るのか。

裏切りは神を意味する。だが人間は愚かだ。セルシーはソラと同じことを考えていた。

裏切りの母

「今日もいい天気だな」

晴れた空の下で、ソラは家の前で背伸びをして呟く。

結局、リリカは昨日一度も姿を見せなかった。だが、今日起きてみると、家のいつもの場所にいた。ソラはリリカがいなかった理由を聞くのを忘れたことに今気づいた。だが、理由がどうであろうと、家にいることに変わりはない。だから聞くだけ無駄。

ソラからすれば母より金の方が大事だ。だから聞かないことにした。「それにしても今日の母さん何か変だったな……」

今朝リリカは、ソラに目を向けず、ただ黙ってパンを食べていた。前では当たり前のことだったが、今になると少し違和感を感じる。まあ挨拶ぐらいしたらどうだよ、とは言わなかったが。

様子がいつもと違っていた様な気がしたのは多分、気のせいだ。

「ま、いっか」

ソラは母のことを考えるのを止め、家に入ろうとした。すると、

「それで、どうやってやるのだ」

家から若い男の声が聞こえた。この声にソラは眉をひそめた。この村に若い男などソラを除いて一人もない。あとは爺だけだ。それに、今この家にはソラが見てきた限りリリカ一人しかないはず。何かおかしい。先程見た時はリリカしかいなかった。それからソラはずっと家の前にいた。誰がどこからか家に侵入したのか。

「大丈夫です。私は時雨家に伝わる伝説の武器を持っていますから」
今度はリリカの声が聞こえた。伝説の武器なんて、初めて聞いた。そんなものリリカはいつから持っていたのか。分らないことだからだ。

「時雨に伝わる伝説の武器とは……あの？」

どうやら男はその武器を知っているかの様だ。何のことだろう。ソラが扉に顔を近づけると、

「はい。『時を操る黄金鎌』です」

自信にあふれたリリカの声が耳に飛び込んできた。時を操る黄金鎌とは何なのだろうか。黄金鎌と聞いてソラの頭に真っ先に浮かんだのは昨日作った、あの武器『バナナ』。だが、あの鎌はバーニアがくれた普通のものだ。

それに時を操るなんてとてもあの『バナナ』にはできそうにない。家の前で考えていると、またの声がする。

「まずそれを使って、村の人間を全て虐殺するのです」

「虐殺っ!？」

ありえない言葉を聞いてしまったソラは、何も考えず家の扉を勢よく開けた。

「あら」

そこにはリリカと、見慣れないマントの男が立っていた。

「誰だ貴様は。僕の邪魔をするようなら殺す」

男は右手に短剣を持って近づいてきた。ソラはそれに合わせて足を一步後退させる。

「その黒髪……貴様はまさか」

ふと男は足を止め、こちらを指差してきた。

「時雨次期教祖時雨ソラか」

「だったら何」

「成程。確かに悪餓鬼の様な顔をしている」

そう言って男がリリカに顔を向けると、リリカは静かに頷く。

「安心しろ。殺しはしない」

「あのさ、あんた誰？人の家に勝手に入っておきながら随分偉そうだね」

「僕の名を知らないのか。それでよく次期教祖が務まるものだな」

「嫌味はいい。俺が聞いているのはあんたが誰か、ということなんだけど」

「そんなに知りたいか。なら教えてやる」

男は短剣を腰に差し、腕を組む。

「僕はクレデイス教次期教祖セルシー・クレデイス。我らが教祖ル・ミイ様は私の父上だ」

「セルシーって……」

セルシーと名乗った男。彼はクレデイス教次期教祖。ソラとは必ず敵対すると思われていた人物だ。まさかこんな形で会うとは。

「何でセルシーの野郎がここにいるんだよっ!？」

ソラが叫ぶと、涼しい顔をしたリリカが近づいてきた。

「ねえソラ」

何故かリリカに恐怖を覚えたソラは、何も言えなくなった。

「どうしてこうなったのか、知りたい？」

「……」

「知りたいに決まってるだろうって感じの顔してるわね。あなたは昔からすぐ顔にでるんだもの」

確かに知りたい。だが、何も言えない。

考える間を与えずに、リリカは迫ってくる。

「あなたがなんて言おうと、教えてあげるわ」

「ど、どうして」

震えた声でソラは聞く。すると、リリカの腕がまな板の上の包丁へと向かう。

「っ!」

「これが答えよ!」

憎しみに満ちた声と共に振り下ろされる包丁。ソラに避ける時間はない。

「うっ」

包丁の刃はソラの右肩から腹まで、斬りつけた。同時に、傷口から血が噴き出す。

「……どう……して」

ソラはしゃがんで、左手で傷口をおさえる。

「あなたは決して行ってはいけない道を進んでしまったのよ」

リリカは血が付着した包丁をまな板に戻す。

「俺を殺す………気？」

「先程言ったように、今貴様を殺しはしない」

混乱するソラに今度はセルシーが近づいてきて言った。

何の為に俺を斬ったんだ。「どうして、教えてくれないの？ 母さん」
なんて優しい言葉もかける気はもう、ない。

「ふざ………けるな」

「貴様には、死ぬ前に『彼』を探すという役目があるのだ」

「だから『彼』って………」

意識がだんだん遠のいていく。最大の敵のセルシーの前で気絶なんてしたくない。

「ふっこれからショータイムの始まりだな」

「はい」

嬉しそうな二人の声が聞こえる。ショータイムって何なんだ。『彼』って誰なんだ。どうしてセルシーがここにいる。

まだ分からないことがたくさんあるのに………。

まだ、起きていないといけないのに………。

「何なんだよ………」

ソラの意味と関係なく、身体は前に倒れていった。

「ふははははっ!!」

セルシーの笑い声と、異常な暑さにソラは目を覚ます。真横にある時計を見ると、気絶してから少なくとも十五分は経っている。

ソラははっとして起き上がる。家にセルシーとリリカの姿がない。

「まさか！」

嫌な予感の中した。

「きゃああああっ！」

ソラの耳に女の悲鳴が飛び込んできた。

「誰か助けて！」

誰かが襲われている。誰かが殺される。まさか、セルシーがやって

いるのか。

そう思い込んだソラは、傷の痛みを我慢して立ち上がった。血はもう止まっているが、それでも痛い。

だが、ここで寝ているわけにはいかない。

ソラは血のついた手でゆっくり扉を開ける。

「なっ何だよこれ・・・」

目の前に広がっていたのは、燃え盛る家と、薩摩芋畑に積まれた人々の死骸の山。

美しい秋雨村の原型は留めていない。これではただの廃墟だ。

一体、ここで何が起こったのだろう。ソラが気絶していた短時間でこうなったのか。

「まさか、全部セルシーの奴がやったのか？」

それ以外に考えられない。もしそうなら、セルシーを殺す他ない。

「くそっ・・・」

ソラは血だらけの体を無理矢理動かしてセルシーを探す。

奴を見つけたら、この手で必ず殺してやる。セルシー、いやクレデイス教そのものを潰すためにこの『バナナ』は存在しているのだから。

だが、セルシーの姿は見当たらない。リリカの姿もない。

「ソラ兄ちゃん！」

ふと、後ろからマナの声が聞こえた。

「マナ？」

ソラが後ろを振り向くと、血まみれの服を着たマナが走って来る。

生存者がいたことにソラは少し安心した。

マナは無傷の様だが、かなり焦っている。

「ママが、ソラ兄ちゃんを連れて逃げろって！」

「えっ？」

突然言われたことにソラはきよとした。

「この村は危険だから、逃げて生き延びなさいって・・・・・・・・ママが！」

マナは必死にバーニアの伝言を伝える。

「それ……バーニアが言ってたのか？」

「うん！」

あれだけボロカスに言ってきたバーニアがソラを助けようとしているのだ。それが驚きだ。

「ママは、僕とソラ兄ちゃんの為に自分からあいつに立ち向かっていったんだ！」

「何だと？」

「だから、逃げよう！逃げて逃げて、生き延びるんだ！」
と言って、マナはソラの腕を引っ張る。

「ちよっと待て！この山は食料無しで降りられねえだろ！」

「でもここにいたら僕も、ソラ兄ちゃんも死んじゃう！」

マナの気持ちも分かるが、このルキアビッツ山は食料無しで降りることはできない。まして怪我人であるソラとまだ五歳のマナが手ぶらで山を降りられるわけがない。

それに、ソラはセルシーを許せない。だから、ここで逃げるわけにはいかないのだ。

「どうせ死ぬなら、セルシーの奴を殺してから死んでやる！」

「やめてよ！そんなことしたって何にもならないよ！命を粗末にしないで！」

腕を引っ張る力が強くなる。ソラも必死に抵抗するが、マナも退く気は無い。

「逃げるならお前一人で逃げやがれ！」

「嫌だ！」

「どうした、時雨。仲間割れか？」

二人が言い争う最中、横からセルシーがやってきた。セルシーの手にある血だらけの短剣を見たマナの顔が、さらに青ざめる。

「そっソラ兄ちゃん逃げよう！」

「駄目だ！」

「ふはははっ」

焦るマナを見て、セルシーが笑う。

「折角お前を助けようとしているのに、その気持ちを無駄にするのか？」

「どうせ、俺が今から逃げようとしたら殺すんだろ？」

そう言いながら、ソラは相手に見えないように上着の中にある鎖鎌に手を伸ばす。

「いや、お前は今殺さないと何回言ったら分かるのだ。殺すのは……」

ソラの行動に気付かないセルシーは、マナに視線を向ける。

「ひっ……」

「お前だ。チビ」

どうして。どうして俺だけは殺さないんだ。ソラにはセルシーの考えていることが分からない。

「この村の人間は時雨ソラ以外全て殺せ、とのルーミイ様の命令だ。だから……」

セルシーが喋っている隙に、マナが木の棒を手にソラの前に躍り出る。

「うわあああああっ！」

「ほう？」

大きく振り下ろされる木の棒を、セルシーは短剣で簡単に受け止める。

「まだまだだなチビ。これではクレデイス教D級戦闘員以下だ」

そして、逆に持った短剣による連続突き攻撃が繰り返される。ソラでさえ避けられないであろうあの攻撃を、子供であるマナがまともに受けては……

「ははははっ！」

「につ兄ちゃん……」

セルシーの短剣はマナの心臓を貫いた。セルシーがざしゅっと短剣を抜くと、マナは人形のようにその場に崩れ落ちた。

「マナ……」

「これで、何人目だったか？」

ソラは足元で倒れているマナを黙って見つめる。

「さて、時雨。貴様はどうする気だ。その傷だらけの身体では僕とは戦えないだろう？」

「・・・・・・っ」

右手に持った鎖鎌はまだ出さない。いや、出せなかった。

時の黄金録

「心も体も傷だらけの貴様と戦っても、僕が面白くない」

そう言って、セルシーは短剣についた血を振り払った。

「あんたが面白いとかさ、俺にとっては全く関係ないんだけど？」

「例え貴様が元気でであろうと、僕がつまらないことには変わらない。だが、僕には貴様を殺すな、というルーミ様の命令がある」

「へえ、あんたは俺を殺したら駄目なんだ？でもさ、俺にそんな命令はないから、あんたを殺してもいいんだよね？」

「そういうことになるな」

ソラは思った。

セルシーは、教祖命令によって俺を殺せない。俺は、命令というものに縛られることはないのでセルシーを殺せる。

もしかしてこれは、ものすごい有利なのかもしれない。なのに、このセルシーの余裕は何なのだろうか。

ソラに殺されるわけがないというようなこの余裕。これはやはり、戦闘経験なのだろうか。

セルシーは先程マナにやったように明確に心臓を狙って攻撃する。たくさん人を殺しているから、人を殺すのは罪人の行いだ、なんていう戸惑などとくに消え失せているのだろうか。

それに比べて俺は昨日、バナナの練習で死にかかった。散々「殺すぞ」と言っているのに本気で人を殺そうとしたことはない。実際人を殺そうとしたら確実に戸惑うだろう。

そんな俺なんて奴からすれば素人。雑魚だ。

いくら有利だとしても、バナナをろくに扱えないようでは、戦闘のプロであろうセルシーに簡単に捕まってしまう。そしてクレディス教本拠地ティアーマインド神殿に連行されてしまうのが落ちだ。

同時にセルシーは思った。

どうしてソラは戦おうとするのだろうか。どう考えても勝ち目がない

のではないか。

産まれてからずっと、この村にいた彼に戦闘経験があるとは思えない。その前にまず、戦いのための武器すら持っていないだろう。

それでも、ソラは殺してはいけけないと教祖様は言う。どうして。

教祖様は何を考えているんだ。

正義感のある性格をしていると言われる『彼』。だが、『彼』は人間離れした強さを持ち、悪を容赦なく斬り捨てる。確かに、『彼』は危険な存在だ。自分やクレデイスA級戦闘部隊を全員派遣しても勝てるかは分からない。

だがその『彼』を、ソラに探してもらって何になる。もし『彼』が悪餓鬼ソラを悪とみなし殺したら、クレデイス教の時雨撲滅計画は台無しだ。

それに『彼』が、卑怯を主とするクレデイス教に味方をするわけがない。だとしたら、ソラや時雨教に味方する可能性もある。そうならたらクレデイス教は終わりだ。

どちらにしろ不具合だ。ここでソラを殺した方がいいに決まっている。

セルシーは自分の耳に手をあて、会話魔術を発動させる。

会話魔術は魔術を志した者であれば子供でも使える初級魔術で、電話のような役割をする。今のセディアースでの生活になくてはならないものとなっている。無論、話してはいけけない秋雨村で使う人間はいなかった。

魔術なんていうかったるいものが嫌いなソラは、使えないどころか会話魔術の存在すら知らなかった。なので、セルシーが何をしているのか全く理解できない。

セルシーが魔術を使ったその相手は、遠く離れたティアーマインド神殿にいるルーミィだった。

「教祖様。申し訳ありませんが、奴を生かせという命令には逆らわせて頂きます」

ソラがこいつ何を独り言言ってるんだという目で見ている。だが、

そんなことを気にする前にソラにも聞こえるぐらい大きな声でルーミィの返事が来た。

「何を言っている！ここで奴を殺したら、どうなると思っているんだ！」

「ですが、『彼』を時雨に探してもらって我等が有利になれるとは思いません。それどころか、不利になるのではないかと少し焦りつつもセルシーは言う。

「私の命令は絶対だ！逆らう様なら殺す！」

「申し訳ありません・・・！今のは忘れっ」

「もう遅い。お前がそんな馬鹿な息子だと思わなかった」
会話魔術が途切れる。

「はぁ・・・」

セルシーがため息をついてソラを睨みつけると、

「はははっ」

横でソラが笑っている。

「何がおかしいのだ」

「だっせー。見捨てられてやんの」

「何だと・・・」

怒ったセルシーが短剣を抜く。それでもソラは喋り続ける。

「そっかーじゃあ俺が今ーお前を殺さなくてもーあのクソティアーマインド神殿でーお前はー逝っちゃうのかー」

この妙に間延びした言い方。セルシーが嫌いな口調だ。もちろんソラも、セルシーを苛立たせるためにこんな口調をしているのであり、実際はこの口調を嫌っている。

「教祖様はああ言っているが、必ず僕を殺したりはしない！」

「へえー・・・あのルーミィのクソオヤジは親馬鹿だったの？俺にはあ、とつてもそうには聞こえなかったなー」

ソラが笑っていると、

「だ、黙れ！」

とセルシーは短剣を逆手に構える。

「お前、可哀そうだな」

まだ鎖鎌は出さない。出すのは、セルシーが攻撃してからだ。そう思っ
てふざけた口調で喋るソラだが、鎖を持つ手は手汗で濡れている。

「黙れ黙れ黙れ黙れ！」

セルシーは短剣を持ちかえる。よく見ると、セルシーの手も汗で濡れている。

「感情に身を任せたらここ魔界で死ぬって誰かお偉いさんの言葉が有名だよな？」

「黙れっ！」

短剣を持った男が感情に吞まれ、地面を蹴る。それに応じてソラが鎖鎌を出そうとすると、

「待ちなさい」

声とともにセルシーの後ろからリリカが現れた。それと同時にセルシーの足も止まる。

「母さん……！！！」

ソラは憎しみに満ちた目で母を見つめる。腹の傷をつけたのはあいつだ。絶対に許さない。でも、どうしてあいつが今ここに。

「セルシー！！クレデイス。あなたには教祖様のお考えが理解できないのですか」

教祖様、ねえ。やっぱりあんたはクレデイス側の人間になっちゃったんだな。ソラはクレデイスがもっと憎くなった。

「教祖様の考え……？」

セルシーは構えるのを止め、リリカに振り返る。

「ええ。『彼』をこちらの味方につけるには、そこにいるソラは重要なのです」

「こちら？ ああ、クレデイス教のことだね」

話をよく理解できないまま、ソラは嫌味混じりに口を挿む。

「何を偉そうに。『彼』のことを全然知らない馬鹿が！」

嫌味をそのまま返す様に、セルシーが言う。

「じゃあ『彼』について具体的に三十文字以内で説明してよ。俺が、『彼』の家族になれるぐらい詳しく教えて」

「どれだけ貴様が『彼』についての知識を積もうと、『彼』の家族になれる者は存在しない」

ソラの要望に、セルシーは冷静に言い返す。

「なれるぐらい、だよ。誰も真正銘の家族になるなんて言っていないし」

「そうだとしても、僕が貴様に説明する義務はない」

「じゃあ何で全然知らない馬鹿だとか言ってくるんだよ」

「その名の通り、貴様が馬鹿だからだ」

「へえ、それ言ってどうすんの？俺を怒らせて喜んでる？もしそうだったらただの阿呆？……でも、生憎、俺は挑発に乗るほど短気じゃないし？」

ソラは両手を広げて、馬鹿じゃねえのお前と言うように笑う。

「ソラ」

「何であんたが来たわけ？」

「あなた、あの鎌はどうしたの」

とリリカが聞く。

「鎌？何の事だよ？」

あの鎌が、さっきセルシーとリリカが話していた時雨の家宝『時を操る黄金鎌』のことだと、ソラは薄々気が付いた。

「バーニアさんが私に譲ってくれた金色の鎌よ」

「俺は知らないよ？」

今現在、時を操る黄金鎌はバナナと勝手に名を変えソラの手の中にある。だから、これは嘘だ。

だが、これが嘘だとセルシーやリリカは気がついていない様だ。これは好都合なのか。

しかし、分らないことが山ほどある。あの鎌が時を操るとは、どういうことなのだろうか。ソラが振り回した時は本当にただの鎖鎌だった。

「女。それはまさか時を操る黄金鎌のことか」

黙っていたセルシーが口を挿む。

「ええ………」

リリカは少々焦り気味に言う。

「まあ、あれは我等クレデイス教は必要としていない。だから、今見つからなくてもそのうちクレデイス捜索部隊が探し出すだろう」
そう言ってセルシーはリリカから視線を逸らす。

「………あんたさ、必要としてないのにどうしてそれを求めるわけ」

しばらく間を置いてソラは言った。

「理由は簡単だ。その鎌を時雨の腐った次期教祖が使ったら、クレデイス戦闘部隊と対等に殺り合えるからだ」

「それって俺限定？」

「ああ。『時を操る黄金鎌』、通称『ディバイン』は………
時雨の血を持つ者に時を操る力を発揮するからだ」

「時を操る力？ 何だよそれ」

「読んで名のごとしだ。そんなことも知らんのか？ 貴様は阿呆だとは思っていたが、ここまで馬鹿だとは思わなかった」

と、セルシーがリリカに顔を向けると、リリカは静かに頷く。

ソラは挑発を無視して考える。時を操る力とは、何なのだろう。
使ったら時間を戻したり出来るのか。それとも、時間を止めるのだろうか。

分からないことだらけだ。

まず、セルシーがこの村に来た理由。

この時を操る黄金鎌、ディバインの正体。

そして、誰もがソラに会わせようとした『彼』。

何もかも、この鎌を振れば分かるかもしれない。今なら、セルシーも隙だらけだ。

だが、もしこの鎌をセルシーの短剣に跳ね返されたらソラはお陀仏だ。それでも、奴らが分かっているのは鎌だけで、まさか鎖に繋が

っているだなんて考えないだろう。

「言ったじゃん。俺に挑発は通用しないって」

ソラはゆっくりセルシーと間合いを取る。

「貴様『彼』やその鎌が何かも知らない割に随分余裕だな。馬鹿だからか」

あと少し。セルシーの攻撃が避けられるくらいまで。

「まあいい。先程言った様に僕は貴様と戦っても面白くない。だから今日は引き返すとするか」

そう言いながら、セルシーは短剣を右手に持ったままだ。

距離は十分開いた。ここからなら……大丈夫！

「お前、何のためにこの村に來たんだよ！」

ソラは一心不乱に鎌ディバインのついた鎖をセルシーに向け振った。
「なっ……」

何かがおかしい。

いくら鎖が長いとはいえ、こんなに思い通りに動いてくれるものなのか。セルシーの顔がだんだん歪んでいく。

（時間がゆっくり流れている……！）

ソラが気づいた時には、セルシーの頬から血が噴き出していた。

金の亡者時雨

時間は普通に流れ出した。

「・・・・・・・・！」

リリカとセルシーの顔は心の底から驚いたという感じだ。それを見たソラは今までに経験したことがなかった小さな快感を感じる。

先ほどリリカにつけられ腹の傷が気にならなくなるぐらい、ソラは楽しんでいる。

それでもソラも一緒になって驚いていたことには変わりは無かったが。

「貴様、それは・・・・・・・・まさかディバインか」

と、セルシーが尋ねる。セルシーは短剣を持たない左手で、頬の傷をおさえている。顔つきからして相当シヨックだったのだろうか。

「こいつの名はバナナだ。時を操る黄金鎌だとか、ディバインだなんてネーミングセンスのねえ名前で呼ぶんじゃないよ、カス」

ソラに二重人格が出てきている。リリカはセルシーより先に気付いた。

村に行く途中、リリカはセルシーにソラが普通の性格と、人を虐待することに快感を抱く性格の二重人格を持つ人間だとは伝えておいた。

リリカからすればそれを見分けるのは簡単だ。なぜなら、ソラの裏の性格が出た時は決まって『カス』『ゴミ』などといった毒舌を吐くからだ。

それにしても、いつの間にソラはディバインを手に入れたのだろうか。ディバインは時雨の血を引く者の思い通りに動き、時間を操る力を持つ。

あれはソラに持たせると危険だ。おまけにソラの裏の性格は『思い通りに動く』という利点でさらに危険になっている。

小さく不安を抱くリリカの横にいるセルシーは、傷が気になり過ぎ

て、まだこれが二重人格だとは気付いていない様だ。

「それは余計な鎖が付いてはいるが、ディバインなのだな？時雨」
「知らねえよ」

「貴様は時を操る力を使い、僕の動きを遅くした。そして頭の中で僕の顔に傷をつけようと考え、ディバインを振った。そうでもないとの馬鹿時雨がこの僕の顔に傷などつけられるはずがない」

ソラはセルシーが何を言いたいのか理解できなくなった。

先程の一撃は、何も考えず振ったものだ。

誰も「時よ、遅くなれ！ふはははは！」だとか、「セルシーのクソ野郎の顔に傷をつけてやろうか？ひゃーはっは！」など考えてはいない。

「……何考えてるんだ俺。」

「この僕の美しい顔に傷などつけたな！許さん！」
考えている間にセルシーが短剣を手に走ってくる。

こいつ、ナルシストだったのか。ソラがそう思える暇があるぐらい、セルシーがゆっくりと走ってくる。また、時間がゆっくり流れているのだと、気付くのは早かった。

「貴様は何をしても殺す！」

そう言って高速で突き攻撃を繰り出すセルシー。一般人の目から見れば、残像で短剣が複数に見える程その攻撃は凄まじい。

だが、そんな攻撃も、ソラにとってはふざけている程遅く見える。

「ノロいんだよ」

ソラはセルシーの視線が移動するより先に後ろに回り込む。ソラが今のように、普通に喋っても、時が遅くされているセルシーにとっては早口で何を言っているのかわからないだろう。

「っ！」

セルシーが、目の前にソラがない、と気づいた直後。ソラが腕を大きく振り上げて、肘でセルシーの背中を強打する。

「ぐっ……」

時がまた普通に戻る。

セルシーは痛そうにしているが、たいした怪我はしていないようだ。その反面ソラは、

「あーつまんね」

と言って頭をかいている。

「卑怯だぞ貴様……・……・ディバインなんぞに頼って勝って嬉し
いか」

「卑怯?？」

ソラは少々裏返った声で聞き返す。

「まさか卑怯も知らないのか。馬鹿時雨」

「違う。クレデイス教ってさ、『卑怯は神を意味する』とか言ってる割に、お前は俺を卑怯って言うんだな〜って思っただけ」

「な」

セルシーは固まった。同時に自分は墓穴を掘ったと後悔した。

「はーん……・……・」

微妙な笑みを浮かべたソラがセルシーを見ている。

「お前さ、実は影でクレデイス教を嫌う正義オタク野郎ってやつ？」

「ち、違う！僕は心からクレデイス教を信仰している！」

「本当か？」

「本当だ！」

焦るセルシーを見たソラは少し考えて、

「一つ聞くけどさ、お前がここに来たのって村の人間を虐殺するた
めか？」

と聞く。

「そうだ。時雨に心の傷を負わせろとの教祖様の命令だ」

「じゃあさ」

ソラの視線が黙り込んでいるリリカに向かう。

「こいつは……・……・」

怒りが籠った力強い左腕がリリカを引き寄せる。

そして、ソラは右手で鎖鎌の刃を持ち、彼女の首に突きつけた。

「殺さないわけ？」

「ソラっ！」

必死に抵抗してもリリカは戦闘経験のない、弱い女性だ。普通の男性からしたら、大して力を持たないソラが相手でも、勝てない。

「彼女を殺したら教祖様がお怒りになる」

セルシーは冷静に答える。

「何だよ。こいつも村の人間なのに」

「貴様は知らないだろうが、我々がこの村の場所を突き止めることができたのは、彼女が秋雨村の所在を教えたからなのだ。だから教祖様は彼女をたいそう気に入っている」

「気に入る？」

「……さらに、高価な宝石のネックレスを彼女に与えるとのことだ」

「何？」

ソラは驚いている。

当たり前だ。どんな奴でも母親が裏切ったなんて信じたくないに決まっている。やはり裏切りは最高だ。クレデイス教は正しいのだ。

セルシーはソラが絶望に果てる瞬間を想像して心の中で喜んでいた。だが、

「高価な……ネックレスだと？」

ソラが口にしたのは予想もしなかった言葉だった。

「それはいくらするんだ？何が買えるんだ？」

「は……？」

「教えろよ？」

こいつ、おかしいのか。セルシーは時雨ソラという男が分からなくなってきた。高価と聞いた途端、目の色が変わったり、突然今まで口にしなかった言葉を喋りだしたりと、変な奴だ。どうやらただの馬鹿ではないのかもしれない。相当の金の亡者だということはよく分かったが。

「価格についてはこの僕もよく知らないが、おそらく我がティアーマインド神殿並みの豪邸一つは買えるのではないか？」

セルシーは試しに言ってみる。もし奴が単純なら、驚愕の表情で、『豪邸！？本当かそれは！？』

とか言って首に突きつけたディバインを降ろす。そして僕は奴を拘束してティアーマインド神殿に連行。教祖様はああ見えて甘いのだ。縄で縛りつけた奴を連れて帰ればきつと許してくれるだろう。いや、教祖様は時雨を放し飼いにしろと言った。捕まえてはいけない。

しかし、教祖様は時雨を放し飼いにして何をするつもりなのだろうか。この秋雨村襲撃でクレディス教が時雨教に勝つつもりならば、時雨をここで殺した方が早い。

さらに、教祖様は秋雨村を襲撃したら、時雨は放って『彼』を探せと僕に命令した。『彼』を探して何になるのだろうか。

セルシーは『彼』を見たことがある。しかし覚えているのは大量の返り血を浴びた背中だけで、顔は知らない。どうやって探せばいいのか。

それはともかくとして、これで全て計画通り。あとは教祖様に従って動けばいいか。

セルシーが安心してソラの答えを待つ。だが、

「豪邸？」

ソラは普通の顔をして聞き返してきた。鎖鎌を降ろす気配すらない。

「そうだ。物凄く広い豪邸だ」

「嘘つけ。ネックレス一つで豪邸が買えるなら、どんだけ宝石ついでんだよって話になるだろう？」

「うっ」

まさか、簡単に嘘を見抜かれるとは。セルシーはソラを少しみくびっていた。

「お前嘘つくの下手だな。だからカスなんだよ」

「何だと……」

セルシーが再び短剣を構える。すると、セルシーの耳に会話魔術を発動した時にでる水色の糸が飛び込んできた。ルーミィだ。

「セルシー！」

「……教祖様？」

「よく聞け。時雨は後回しだ」

「それは、どういうことでしょうか？」

「『彼』の居場所が分かった」

「『彼』……ですか？」

「そうだ。あやつを殺す機会は今しかない」

「時雨は……」

「時雨は放し飼いと言ったはずだ。そのまま一日分の食料を渡しておけ」

「食料？」

「ルキアビッツ山脈を下りるには食料が不可欠だ。奴にここで死なれたら困る」

「はあ……分かりました。では僕はどうすれば？」

「『彼』をルキアビッツ山脈の南にあるクレイエル帝国で行け」

「ですが、『彼』だと特定できる根拠はあったのですか？『彼』の顔を見た信者たちは皆殺されてしまいましたし、今現在顔を知っている者はいないのでは」

「それは帝国のクレディス教支部に送った幹部に聞いてくれ。ここで言うとき雨にも聞かれる」

「いや、時雨は聞いていないはず……」

そう言ってセルシーは先程までソラが立っていた場所を見る。ソラがいない。

「バーカ」

ソラの声と共にセルシーは後ろから軽く頭を叩かれる。セルシーが後ろを振り向くと、すぐ近くにソラが立っている。

「時雨!？」

ルーミイが呆れたのか、会話魔術が途切れた。

「クレイエル帝国？そこに『彼』ってやつがいるわけ？」

「貴様……」

「じゃあ俺も今お前を殺すのをやめてさ、そこに行こうかな？クレイエル帝国なら儲け話がたくさんありそうだし？」

ソラはそう言って鎖鎌を降ろした。自由になったリリカが走ってセルシーのところに行く。

「ネックレスはいいのか？」

セルシーがソラを小さく試す。

「一つのネックレスのために敵の本拠地に行くなんて自殺行為じゃない」

ソラの答えを聞くと、セルシーは頷き荷物袋を差し出した。

「何これ」

荷物袋は変な出っ張り方をしている。ソラが近づくと甘い匂いが漂って来る。

「喜べ、時雨。ゴリラやチンパンジーに似た貴様にぴったりの食料だろう？」

セルシーの言い分からして中身の想像はついた。

ソラが袋を開けると、予想通り、袋いっぱいバナナが詰まっている。

「ふざけてんのか？」

「その女から聞いている。昔『走る！回る！飛ぶ！バーナナくん』という大きな玩具を与えたらかじって破壊した、とな」

「何時の話だよ！」

「それ程バナナが好きなら食料はバナナで十分だろうと思ったただけだ」

「このクソ野郎が……」

「ふっさらばだ。ペット……いや猛獣の時雨くん」

セルシーが背を向けて、リリカと一緒に歩いていく。よく見ると、二人の先に運転手の信者が乗った小型の車が用意されている。

「くっそー」

セルシーたちが去った後、緊張が解けたソラに腹の傷の痛みが戻ってきた。

「少し休んでから行くか……でもクレイエル帝国ってどこだ？」

ソラが座ると、隣にマナの亡骸がある。

「ごめんな、マナ」

そう言っただけで冷たい手を取る。すると、手のあった場所に血文字が残されている。

『がんばってかれをさがしてね』

「だから『彼』ってなんだよ。結局リリカのクソババアは本を自分で持って行ったし……」

考えても答えは出ない。

ソラはこれから自分が人を殺す時が来ると思うと何故か怖くなった。

紫髪の魔女

「このバナナ何気にうめえな」

セルシーに貰ったバナナを食べながら、ソラは歩く。

『彼』の秘密と、金を儲けるために、クレイエル帝国に行かないといけない。

だが、村から出たことがないソラはもちろん、道を知らなかった。そもそもクレイエル帝国という名さえも初耳だ。

なのでソラは、セルシーたちの乗った車のタイヤの跡の上を歩く。あいつらは必ずクレイエル帝国に向かう。ならば、車の跡を通ればいいのだ。そうしたら、クレイエル帝国に行けるだろう。

さすがに「俺あったまいー!」とは思わなかったが。

「それにしてもこのルキアビッツ山、北の方にある割に南国みてえだ。こういうのってジャングルって言うんだっけ?」

ソラは昔読んだ物語に出てきたジャングルを思い浮かべて独り言を言う。

一応世界的な有名人であるソラがバナナを銜えて歩く、ジャングル。一枚の絵にすると全く合わない。一般時雨信者が見ると驚愕の表情を浮かべるであろう光景だ。

「キキー!!!」

どこからか、動物の鳴き声がした。

「あ?」

ソラが上を見上げると、野生の猿がソラをガン見している。その視線は間違いなくバナナが入った荷物袋に向かっていてる。

「キキー! キー!!!」

猿が木から勢いよく降りてきた。降りるといふより、落ちた、だった。

「なんだよ?」

「キー!」

きよとんとするソラに猿が両手を出す。よく見ると、猿は気持ち悪い程痩せている。もしかしてこのバナナが欲しいのかこいつ。食料がないと死んでしまうのか。

この猿にソラはバナナを恵んでやろうとは思わない。だれがてめえみてえなクソにやるか。ソラは意地悪な感情を頭の中で育んでいた。「残念だったな。このバナナは今の俺の原動力なんだ。てめえによこすわけにはいかねえ」

「キイイ……」

猿はソラの言葉を理解しているかのように黙り込んだ。

こんなに飢えた猿がいるということは、このジャングルは腐っているのか。でも、猿一匹が満腹になれる程の食料は十分にありそうだ。「でも、何でこんなでけえジャングルに食料が足りねえ猿がいるんだ？」

ソラはふと思った疑問を口に出した。

「……ん？」

ソラが辺りを見回すと、他の動物たちも、痩せている。皆、気色悪く飢えている。

「どうして……こんな？」

考え込むソラの周りに、動物たちが集まる。動物たちはソラに甘えるような目で何かをせがんでいる。

さすがのソラも、この光景を放っておけなくなってきた。

「何か、理由があるんだよね？」

ソラはいつもの優しい口調に戻して、一番言葉が理解できそうな猿に聞く。

「キキー」

猿は右手でソラの前を指差す。

「え？何？」

「キキー、キキキキー、キーー!!」

いや、分かんねえよ。俺猿語分かんねえし。ソラは頭に浮かんだ本音を隠す。

「人間語喋れないのか？」

「……この先の洞窟に、神様がいるんだ」

「神様？」

今の声の主は誰だ。周りには人がいない。だとしたら、

「うつまさか」

ソラはおそろおそろ猿を見る。猿は丸い瞳でこちらを見つめている。

「こここのさ、猿が……しゃ、喋った……のか？」

「そうだよ。僕、元は人間なんだよ」

「げっ！」

なんて気色悪い猿だ。人間語を喋ってやがる。そう思っていると、

「私もよ！元々は人だったのよ！」

今度は別の声が聞こえた。

「俺もだ！」

「あたしも！」

「おいらも！」

次々に動物たちが喋る。

「何なんだよこの動物！？」

ソラはだんだん動物が怖くなってきた。喋る動物なんてどこの童話から出てきたんだ。そんな童話を見た時、ソラは吐き気を覚えた。

だが、本物を見るのは別格と言えるほど気持ち悪い。

「僕たちはもともと……ここに住んでたルキア族なんだけど、この先にいる神様に動物にされちゃったんだ」

「る、ルキア族？」

そんな民族初めて聞いた。第一、このルキアビツツ山に民族がいたのは村の人間は教えてくれなかった。

喋らないから当たり前か。

しかも、神様に動物にされるってどういう童話だよ。

ソラはこの光景を夢だと信じたくなった。

「神様って？」

「自称『神様』の魔女だよ」

猿は小声で言った。

「神様って呼ばない動物は手から炎を出して殺しちゃうんだ」

「要するに、その魔女が動物たちを奴隷みたいに扱ってるんだね」
ソラが言うと、動物全員が頷く。

先日、ソラは動物は人間より愚かだと言った。だが、動物より愚かな奴がいたことを今知った。

「魔女は、クレデイス教の命令で僕たちルキア族を取り締まってるんだ」

「クレデイス教の命令か。でもどうしてルキア族に限ってるわけ？」

「僕たちが『彼』に会ったから・・・うわっ！」

突然、黒い霧がソラの前に出る。動物たちはこれが何か分かってい
るようだ。

「か、神様！」

霧が晴れて、地面につくぐらの長い髪の女が現れた。魔女だ。

「こいつが・・・？」

魔女はソラを変な目で見ている。

「あなた、この奴隷たちから変なことを吹きこまれたようね？」

一言言くと、魔女はまたソラをまじまじと見つめる。

「十字架のピアスしてるわね。時雨教で金属を身につけることは禁
止してるから、あなたはクレデイス教の人？」

クレデイスと聞いた途端、動物たちが息を呑んだ音が聞こえた。

ソラの十字架は、時雨の教えを守らないということを象徴している
のではなく、ただの飾りだ。元々ある人が着けていたものだ、母
がくれたのだ。

時雨教の教えを守るつもりはない。だが、クレデイス教に入ったつ
もりもない。

「わたしはクレデイス教のB級戦闘隊長ナナツ。あなたは多分一
般の信者でしょ？ だったらわたしの言うことは絶対服従よね」

魔女ナナツはソラを勝手に一般クレデイス信者と決めつける。

いや、クレデイスと敵対する宗教の次期教祖なんだけど。と言ったらナナツツはどんな表情を浮かべるだろうか。

「わたしのしもべにならない？この動物たちを見張るだけでいいわ。給料ははずむわよ」

「給料っていくら？」

「時給1000マリアよ。どう？」

一時間につき1000マリア。なんて大金だ。

ソラが一般信者ならこの話にのっていたところだが、ナナツツはクレデイス教の者だ。人使いが荒らそうというのもあるが、ソラは仮にも時雨の人間だ。この話にのるわけにはいかない。

「じゃあさ、仲間になるから教えてくれない？」

動物たちが悲しそうな顔をする。それに気付いたソラは動物たちに、心配するなという表情を見せる。もちろん、これは嘘だ。

「何かしら？」

「どうしてこの民族を動物に変えたの？」

「……『彼』よ」

「『彼』？」

「ルキア民族は、『彼』に会ったことがあるの。だから『彼』の顔をよく知っているわ。

それを知った教祖ルーミイ様は、『彼』の特徴を強迫してでも聞き出せてわたしに命令したんだけど。動物にするわよって言ってもこいつらは何も言わなくてね。だから動物にしてやったのに、それでも言わないの」

「それで奴隷みたいに働かせて言わせようってやつ？」

「そうそう。でもこいつらは死んでも言わなさそう」

「ふん」

ソラは事情を理解すると、『彼』について考えてみる。

本当に謎な人物だ。クレデイス教がそこまで気にしているのだから、相当危険な人物なのだろうか。しかし、『彼』自身は時雨教やクレデイス教をどう思っているのだろうか。

ソラのように宗教はカスだと思っているのかもしれないし、二つの宗教のどちらかを影で信仰しているのかもしれない。

本当に分らない。

「ナナツツ・・・さん？」

「わたしは神様。でもしもべであるあなたはその呼び名でいいわよ」
ナナツツは偉そうだ。実際地位はソラよりも断然下だが。

「聞いていい？」

「何？」

「『彼』は、クレデイス教に必要な存在？」

「逆よ。邪魔なの」

ソラは少し驚いた。セルシーが自分やA級戦闘隊員が敵うか分からない程の強さを持つと言っているのだから、てっきり仲間にでもしようとしているのかと思った。

「どうして？」

「『彼』は、クレデイス教を壊そうとしているの」

「クレデイス教を？」

「でも、時雨の味方をしているわけじゃないの。ただ、悪が嫌いな
のよ」

「へえ・・・」

「一般信者でここまで知っているのはあなただけね。他の一般信者は皆クレデイス教を正義だと思っているし、『卑怯は神を意味する』なんて教えを知らないでしょうね」

だから、クレデイスの信者が増えてるのか。ソラはなんとなく納得した。

「さ、しもべになったんだから、わたしの洞窟に行きましょう？」
ナナツツが背を向け歩き出す。

「あ、うん」

ソラはナナツツを後に殺す気について行く。

「・・・」

動物が見ている。それに対しソラは右手の親指を立てて笑顔を見せ

た。

「さ、ついたわ」

ナナツツの洞窟は先程いた場所からすぐ近くにあった。中には何もなく、ナナツツ曰く、必要なものは必要な時だけ魔術で出すらしい。

「あら？」

辺りを見回してナナツツは変な顔をする。

「どうしたの？」

「昨日しもべにした男がいないわ。フードを被っていて顔が見えない人なんだけど」

「え、しもべもう一人いたんだ」

ソラも一緒になって辺りを見回す。

「まだ給料与えてないし、脱走ってことはないと思うの」と、ナナツツが言った直後、

「おい」

洞窟の横から、フードの男が歩いてきた。こいつが、もう一人のしもべか。低い声の持ち主だが、顔が全く分からない。だが、男からは殺気が放たれているのは確かだ。

「あ、いたいた。どこに行ってたのよ」

ナナツツは安心した様子で、男に近付く。男はソラより身長が高い。さらにフードを被っているので若干恐怖を覚える。

「動物どもが魔女を倒すやら言っ、なんか準備してるぜ」

「わたしを倒す？ありえないわ」

あの動物たちはやはりソラを信じられなくなったのだろうか。こうなったら自分たちの手で魔女を倒そうとでもいうのか。

「わたしを倒せるのはセルシー様か『彼』ぐらいよ。少なくともA級戦闘員じゃ無理ね」

「『彼』だったら倒されるのか？」

「だって『彼』って一人で前のA級戦闘隊長を殺したそうじゃない」

気のせいか。今男が鼻で笑ったような気がする。

「じゃあ、俺はお前を殺せると」

「えっ!？」

この男が『彼』だと、ソラはまだ気付けなかった。

フーダの男

「あら、わたしへの挑戦かしら？」

ナナッツは不敵な笑みを浮かべて言った。

この状況で脅えないのか。さすが、クレディス教戦闘隊長だなく。殺し合いは慣れてるってか。ソラは頭の中で小さく感心した。

「それはお前の想像にお任せしとくけどさ、まず俺より先にあの動物どもをなんとかした方がいいんじゃないかねえの？」

男は右手で洞窟の外を指差す。

「そんなの放っておけばいいの。第一、あんな奴隷たちに何が出来るって言うのよ。この山に武器はないし、食料は全部わたしが没収したわ。奴隷たちにはなんにもあげていない」

動物たちを全く気にしない様子で、ナナッツは笑う。

「じゃ、時雨の次期教祖さんが動物どもに食料を与えたことは知らないわけか」

「えっ？」

ソラは無意識に反応した。

おかしい。俺はバナナを動物たちにやった記憶はない。だって、バナナが入った荷物袋だってちゃんとここに……

「あれっ」

ない。荷物袋がない。

まさか、あの動物たちが隙を突いて取っていったのか。待てよ。あれがないと、俺山から降りれないじゃん。どうすんだよ。

「なんですって？」

動物をなめていた、とソラが後悔する前に、ナナッツが口を挿む。

「とにかく行ってみろって」

ナナッツは渋々頷き、

「仕方ないわね」

と言って霧に姿を変える。

「時雨の次期教祖はセルシー様によって殺されたって会話魔術で聞いたんだけど……まさか生きていたなんて！」

ナナツツは一言残して、洞窟を出て行った。

「……殺された？」

ソラはナナツツが去ったのを確認してから、呟く。

どうして自分は今生きているのにどうして殺されたことになっているのだろう。それに、ソラを殺さないように命令したのは教祖ルーミィで、セルシーはこの命令に従ってソラを殺さなかったのだ。なのに、セルシーが殺したことになるのは何故だ。

「あのクソ魔女がいたから言えなかったけど、お前さ、時雨ソラだろ」

ソラが躊躇していると、男が話しかけてきた。

多分この男はクレデイス教の一般信者だ。ならば、クレデイスが正義と教えられているはず。おそらくルーミィの命令『ソラを殺すな』は幹部にしか伝えられていない。

だとしたら、ここで正体を明かしたら殺されるかもしれない。

ソラは決めた。嘘をつこう。

「えっ違うよ」

男は首を傾げて、

「じゃあ、お前の名は？」

と聞く。

「お、俺の名はしぐ……じゃなくて、バナナ…….
じゃなくて」

ああ、もうバレたな。男の口が笑っているように歪んでいる。

こいつが俺を殺すつもりなら、戦う準備をした方がいいのだろうか。そう思っていると、

「はははっ」

男が突然笑いだした。

「な、何がおかしいんだよっ」

「はいはい、分かった。お前が時雨ソラだってことはよく分かった」

やばい、殺される。男が笑っている。これは悪人面だ。

まさかこいつ、ナナツツのしもべだからB級戦闘隊員か。今気づくなんて、俺はなんて鈍感なんだ。

「あのさ……殺す気？」

ソラはおそろおそろ男に尋ねる。

「何言ってるんだよお前。俺がまだ人を殺したことが無い無罪なお前を殺すような奴に見えるか？」

思いつきり見えるんだけど。とは言い返せない。

でも、この男がソラを殺す気はないようなので、少し安心した。

「ん？待てよ。時雨ってことは」

男は何かに気づいて視線を右下に落す。

「どうしたの？」

「……お前、『彼』を探せとかゴミ野郎かクソ野郎に言われなかったか？」

一瞬この男の喋り方が、ソラの裏の性格と似ている様な気がした。まさか。こんな喋り方する奴、他に普通にいるよな。そう信じたい。

「えっと、ゴミ野郎とクソ野郎って誰？」

「クレディスのルーミィとセルシーのことだ」

「うん。確かにくそセルシーにも言われたけど、俺いろんな人に『彼』を探しなさいって言われてるんだよ。まあ、俺は『彼』が何なのか全然知らないんだけど」

そう言ってるソラは、リリカが持っていた本の表紙を思い出した。あの悪人面が『彼』とは聞いたが、あれはあくまで絵だ。実際は違うだろう。

「言っとくがな、あの魔女がいる場所じゃこんな話できないんだぜ。だから俺は動物がバナナを食って元気になったことにしてあいつをどかしたんだよ」

「動物が何かしようとしてるってのは嘘だったわけ？」

「そうだな」

「えっ……俺のバナナは!？」

「いや、それは知らねえよ。俺が見たのは奴らがバナナを貪っているところだけ」

「げえっ！」

くそ、やられた。あの動物どもめ。元々人間のくせに随分いやしい奴らだ。

「残念だが、俺も食料は持ってねえ。だから、あの魔女をぶっ殺して、奪い取ってやろうかと思ってたんだよ」

男は笑って言った。

「あんたクレデイスの人間？」

ソラは普通に聞く。

「いや、違う。ついでに言うとき雨の人間でもねえ」

今時宗教を信仰していないのはすごく珍しい。この男、何なのだろうか。

「じゃあ、何なのさ？」

「さっきも話したがクレデイス教がよく言ってる『彼』、いるだろうか？」

「いや、俺、『彼』については本当によく分かんないんだって。物凄く強い人だってことしか知らないんだよ」

「その『彼』……」

もしかしたら、『彼』のことについて何か分かるかもしれない。ソラは真剣に男の話に耳を傾ける。

「おそらくだが、『彼』は俺だ」

「えっ！？ あんたが『彼』っ！？」

ソラは驚いて後退した。

「俺がクレデイス教に殺されそうになったルキア族の子供を助けてから、クレデイス教は『彼』という呼び名を使うようになったんだよ。だから、『彼』は多分俺のことだ」

「……でもどうして、俺があんたに会わないといけないんだよ？」

「それは知らねえよ」

『彼』でも会わないといけない理由を知らないのに、何故皆会わせようとするのだろうか。ソラが考えても答えの出るものではない。

「それよりさ、どうしてあんた……じゃなくて『彼』は顔を隠してるの？」

ちよつとでも嫌われたら、殺されるのではないか。そういう心配が出てきた。

ソラはあんた、という呼び方を今だけやめようと思った。

「あのナナツツに知られると困るんだよ。あいつからルーミィに伝わる可能性は十分にあるしな。

ま、俺はそれを利用して、奴にしもべとしてニセの情報を流したんだ。クレディス教で、今俺はクレイエル帝国にいることになってる」だから、セルシーたちはクレイエル帝国に向かったのか。これで辻褄が合う。

あいつら馬鹿だな。ソラは思った。

「それとき、『彼』って呼び方止めてくれねえか？時雨の信者は『彼』のことなんて知らねえし、クレディス教みてえだぞ」

「じゃあ名前を名乗ったらいいじゃん」

「……俺はお前を完全に信頼してるわけじゃねえし」

そう言って、『彼』はナナツツが向かった方向へ歩き出す。

「なんだよ、あいつ。『彼』だとか言ってるけど、どーせ強いだけの凡人なんだろう」

ソラは小声で『彼』を侮辱する。

ちよつと偉そうにしすぎたか。まあ俺はこのセディアースで一番大きな宗教『時雨教』の次期教祖っていう立場だし。その勢力は、もう国という領域を超え世界単位なのだ。

そんな世界で、一番偉いのは誰だ。

「……いや、ここで「俺じゃん」と言ったらただの自意識過剰の馬鹿。それでこそ動物以下の愚か者だ。

「そろそろナナツツがああ動物どもの住処に行った頃だろうし、俺は奴を殺してくるか」

と、『彼』が言う。

「えっちょっと待ってよ！まだ聞きたいことが……」
ソラは何を思ったか『彼』を呼びとめる。

「ついてくるか？」

今考えてみれば、他に行くところもないし、食料を手に入れるためには、『彼』について行くしかない。ソラは面倒に思いながらも黙って頷いた。

「…………お前にはこうするしか選択肢はないんだろ？」

『彼』は挑発気味に言ってきた。

（ちっ…………こいつマジうぜえ）

お前なんてこのバナナの時を操る力で瞬殺だ。あのセルシーでさえ恐れた『彼』が、この俺にまんまとやられるのか。見てみたいものだ。

はっ笑ってられるのも今のうちだぜ。

その前に、バナナを取り出して格好つけても、力がはたらかず、時間が普通に流れてしまったらアウトだが。

「ああ、そうだよ！俺にはこうするしかないんだよ！」

「動物の住処はここからまっすぐ行ったところだ。走るぞ」

「あら？何をしようとしていたの？」

二人が住処にたどり着いたのは、ちょうどナナツツが猿に話しかけた時だった。ナナツツはまだ二人に気が付いていないようだ。

「このバナナの皮は何かしら？」

動物たちは脅えて声も出ない。

「おい、クソ」

『彼』は、迷うことなくナナツツの前に躍り出た。この余裕。人殺しには慣れている。リリカやセルシー、ナナツツ、そして『彼』といい、ソラの周りに現れる人物は、危なっかしい人間ばかりだ。

「クソ？」

「あれ、お前クソって名前じゃなかったっけ？」

「しもべのくせに、何時からそんな偉くなったのかしら？」
ナナツツの視線が動物から『彼』へと動く。

「まあ聞けって」

「何よ」

「報告。時雨の次期教祖ソラが港町マグゼラにいらんだってよ」
マグゼラってどこだ。ソラが分かるのは、『彼』が嘘をついてくれた、ということだけだ。これがあるがたいのか、迷惑なのか、分からない。

「そうなの？ いまいち信じられないわ。だってこの動物たちにバナナあげたんじゃないの？」

ナナツツは半信半疑だ。

「でもここにいても暇だし。マグゼラに買い物に行きたいわね・・・
・・・じゃあ、この動物たちをティアーマインド神殿に連れて行ってから、マグゼラに行くわ」

「会話魔術は使わねえのか？」

「だってわたしがルーミイ様に忘れられるの嫌だもの。あ、その前に言うこと聞かないしもべをなんとかしないと」
ソラは何となく嫌な予感がしてきた。

「ここで跪いたら許してあげないこともないわ」

「跪かなかったら？」

「殺すわ」

「じゃあ、死ね」

そう言って『彼』は、どこからか日本刀を取りだした。

フーダの男（後書き）

今回は挿し絵投稿しようと思ったんですけど、ソラの表情と手がk s ったんでやめました。もしマシな絵が出来たら投稿します。

『彼』の素顔

ソラは日本刀というものを初めて見た。今まで読んだつまらないと思っただの中でも、これがでてくると面白くなったりする。

日本刀はその昔、原界（地球）にある極東の小さな国の者が戦いに使ったという。当時は持っている者がたくさんいた。

だが今では、日本刀を持ち歩くと捕まってしまう。それだけ原界が平和主義と化したというのはあまりにも有名な話だ。

この魔界は争いが絶えない。さまざまな武器を持つ者や、原界にはない魔術というものを扱う者が多数いる。それでも日本刀を持つ者は滅多にいない。

なぜなら、日本刀を作る方法が魔界に伝わっておらず、生産したくてもできないからだ。そうになると、日本刀を手に入れるには原界に行くしかない。だが、昔のように売られているわけではないので手に入れるのは困難だ。

それに、今魔界の国の兵士のほとんどはレイピアという細身の剣を改造したものを使う。レイピアの見た目はそのままに、切れ味をよくし、重さを軽減しさらに使う者の魔術に対応した万能の剣だ。もちろんレイピアは、全てにおいて日本刀を完全に超えている。重い日本刀がレイピアを超える部分はない。

だから、誰も欲しいとも思わないのだ。

なぜ『彼』は日本刀を持っているのだろう。クレデイス教の戦闘隊員もおそらくレイピアを使う。どう考えても不利だ。

「日本刀？」

ナナツツも戦況的に不利になる日本刀を不思議に思っているようだ。

「ねえ、こんな話知ってる？」

『彼』は黙っている。

「クレデイス教の戦闘隊員が『彼』に殺された時ね、戦闘隊員の傷をセルシー様が見てみたのよ」

「・・・・・・・・」

「そしたらね、一つ一つの傷が大きかったの。あんな大きな傷、世界中に出回ってるレイピアじゃつけられるものじゃないし、ほかの武器であってもつけられない。だからその時『彼』が使っていた武器が日本刀じゃないかと、わたし思うのよ」

だからなんだ、と言う様に『彼』はナナツツを睨みつけている。

「日本刀って、魔界で手に入れるのはすごい困難なのよ」

ナナツツはハンターの様な瞳で『彼』を見ている。手柄を自分の物にしたハンターはああいう目をするものだ。

ソラは自分もいつかハンターになりたいと思う。だが、ソラが憧れるのは猛獣を狩ったりする、普通のハンターではない。ソラが一度歴史書を読んだ時に出てきた、エムクロスハンターだ。

その歴史書の内容は、このセディアースが出来たばかりの頃の話だった。

昔、市民を殺め財産を奪うことを目的とした悪宗教『ルージ教』が存在した。しかし、その宗教は一年も経たないうちにたった一人の庶民の男によって潰された。

男は正義感溢れる心優しい原界人だった。魔術も使えない原界人の男がなぜセディアースにいたのかはいまだに不明とされている。

その後、とある帝国の初代皇帝は、その男を帝国城に呼び出し、感謝の印として手書きの感謝状を渡した。

皇帝は一言、

「そなたの働きは報酬で決められるものではないと私は思う。これから・・・・・・・・」

しかし男はその感謝状を破り捨て、

「報酬無しだと？ふざけるな！金をよこせ！」

と叫んだ。突然の変異に驚く皇帝。今まで温厚だった男が、金の亡者へと変化したのだ。

「どうした？金をよこせと言っているだろ？」

そうやって男は皇帝を殺害し、帝国のありったけの金を奪った。男はその後セディアースから姿を消した。一説では原界に行った、という噂もある。

このことから、人々はそのハンターのことを、宗教と金を狩るという意味で『エムクロスハンター(M†Hunter)』と呼んだ。その男もまた、日本刀を持っていたという。

エムクロスハンターの話は有名で、セディアースのほとんどの人間が知っているだろう。

時雨教の教えには『世の中金が全てではない。欲を出すな』というものがある。つまり時雨教はエムクロスハンターをあまり称えていない。もはや『ルージュ教』のことは忘れられている。

その反面、クレディス教は卑怯の象徴としてエムクロスハンターを拝んでいる。

「もしかして、あなたエムクロスハンターと繋がってるとか？」

ナナツはどことなく嫌な表情をして聞く。すると、

「エムクロスハンター？ ああ、俺の祖先だ」

『彼』は普通に言った。

「ど、どういうこと!？」

「だから、俺の祖先がそいつだったの。まあ尊敬はしねえけど」

ソラは何がなんだか分からなくなって凍りついた。

何であのうざってえ『彼』と、俺の尊敬する『エムクロスハンター様』が繋がってるんだ、冗談にも程があるだろ、とソラは思う。

「ちょっとあなた、ティアーマインド神殿まで来てちょうだい！」

ナナツは焦って『彼』に近付く。

「お前が俺を殺せたらな」

『彼』は相変わらず挑発的な態度をとる。影でソラが苛ついていると同時にナナツは怒っている。

それが分かるくらいナナツは『彼』に殺気を向けだした。

「わたしをなめて生きて帰れた者はいないわ。それでもいいのかし

ら？」

「舐める？ 確かにお前汚そうだもんな。身体に毒でも塗ってんのか？」

そのなめるじゃないだろ、とソラは少しだけナナツツを応援したくなった。しかし、『彼』はセルシーやA級戦闘隊長が敵わない相手だ。ナナツツが勝てるわけがない。

「そっちから来ていいぜ。先攻するのは好きじゃねえんだ」

『彼』は余裕を見せ付けるように日本刀を右手で回している。

「後で後悔しても遅いわよ」

そう言ってナナツツは右手と左手を交差する。同時に足元に金色の魔方阵ができる。

「……………」

ソラは木に寄りかかってこれから始まるであろう戦闘を見守ることにした。

攻撃魔術というものは、初めて見た。この機会に見ておこう。これから殺す相手に魔術を使う者はいるとソラは確信している。

魔術とはどれだけ強力なのだろうか。いかにも強そうな印象がある。なのに『彼』ときたら刀を構える姿勢も見せず、突っ立っている。

あんな奴やられてしまえばいいんだ。でも『彼』が死ぬとソラが『彼』に会う意味が分からないまま終わってしまう。それに大量のバナナを失ったソラの食料はどうするんだ。

まあこの戦闘で『彼』が死ぬとも思えないが。

「いでよ！ ワイバーン！」

ナナツツが両手を広げる。すると、地面から赤色のドラゴンが現れた。

ドラゴンの全長はソラの二倍を軽く越しているが、ドラゴンと呼ぶには少し小さいような気もする。言えば、子供ドラゴンだろうか。

「グギャアアアアー！」

ドラゴンは翼を大きく広げて、迫力のある鳴き声をあげる。

「行きなさいワイバーン！ 奴を嘴で串刺しにするのよ！」

ナナツツの指示とともに、ドラゴンが『彼』に向かう。

「召喚魔術か。珍しい魔術を使う奴もいるもんだな」

激しいドラゴンの突き攻撃を軽くかわしながら『彼』は言う。

「日本刀の方が珍しいとわたしは思うわ。ねえワイバーン、そいつ焼いてくれる？」

再び指示が送られ、ドラゴンは大きく口をあける。その喉の奥に、赤く光るものが見える。炎でも吐くつもりなのだろうか。

「おいおい、童話じゃあるまいし」

『彼』は呆れている。

「いつまでその余裕が続くかしら？」

「最低でもお前が死ぬまで続くんじゃないの？」

「後悔するわよ」

ドラゴンが炎を吐く。『彼』は横に飛んで避ける。

その炎が避ける前の『彼』がいた一直線上、ソラに向けて迫ってくる。

「おい嘘だろっ！？うわっ！」

とっさに避けたため、炎は直接ソラには当たらなかったが、炎が起こした衝撃波でソラは五メートル程吹っ飛ばされた。

「いってー」

ソラが顔を上げると、『彼』とナナツツがソラを冷たい眼差しで見下ろしている。

「なんだよ、見下しやがって……ん？」

よく見ると、強かった衝撃波のせいか、『彼』のフードが取れている。

「おまえ……」

ソラは『彼』を指差して再び凍りついた。

『彼』に会ってから結構時間が過ぎたが、『彼』の顔は絵以外で初めて見た。

今思えば本の絵は全然似ていなかった。顔は至って普通の顔だった。ソラが勝手に頭で浮かべていた悪人面

や悪魔の様なものではなく、全体的に端麗だ。

『彼』は男からすれば少し長いと感じるぐらいの長さの茶髪で、澄んだ水色の瞳をしている。

これが、エムクロスハンターの子孫で、クレデイス教に恐れられる存在か。

思っていたよりも遙かに人間性が感じられる。外見だけならどこにでもいそうな不良だ。

ソラは意外な『彼』の素顔に違和感を感じた。

「俺の顔になんか付いてるか？」

「いや、別に」

今気づいたが、この場所は動物たちに囲まれている。だが、ソラが吹っ飛んだ場所には一匹もない。確かに、さっきまではいた。

もしかして『彼』も、自分の真後ろにソラがいると分かっている、飛んだのかもしれない。一度吐きだした炎が曲がることはない。飛んだらソラに炎が当たるのは『彼』なら分かっていたはずだ。

ソラに『彼』への怒りが溜まる。

「おい、てめえ」

「あ？」

「俺なんか死ねばいいとでも思ったんだろ」

「何でだよ」

「とぼけるんじゃない。時雨の次期教祖が死んだら、クレデイス教を倒した自分が英雄にでもなれるとでも思ってたんだろ」

『彼』はきよとんとしている。

「それにしてもクレデイス教がつけた名前が『彼』って……ネーミングセンスがねえよな。俺が新しい名前考えてやろうか」

「その口ぶりからして下品な言葉しか出てこなさそうね、時雨ソラ。わたしを騙すなんていい度胸してるじゃない」

ドラゴンを消したナナツツが近寄る。ソラはそれを無視して名前を考える。

「何がいいかな。あ、『怪物』とか」

無視されたナナツツはふん、と一言言って背を向ける。

「おい、時雨ソラ」

「何？怪物」

「俺の名は瞬だ。変な名前つけんじゃねえよバナナ野郎」

「しゅん……」

「今の俺にお前を殺す気はねえが、お前が金やバナナを求めるあまりに、罪もない人を手に掛けるようなら俺はお前を容赦なくぶっ殺す。分かったな」

『彼』は瞬という名の原界人だった。

『彼』の態度に不満を感じつつもソラは、瞬の喋り方があまりにも自分に似ているような気がした。

暁の日本刀

「ちっ偉そうにしやがって」

ソラは舌打ちをして瞬を睨みつける。

今まで何度も思ったが、『彼』がいくらクレデイス教に恐れられる存在とはいえ、地位は断然ソラの方が上だ。

それに最強の『彼』でも時間の流れには敵うわけが無い。時を操る黄金鎌ディバインさえあれば、ソラは『彼』に勝てる。そう信じていた。

「てめえが俺を見下せるのも今だけだ。後にてめえは俺の刃の餌になるんだからな」

ソラは自分でも強気すぎるような言葉を口にしたような気がした。

もしディバインがなかったらソラは終わる。

また、セルシーの時は、ディバインが時を司らないとソラはおそらく敗北していたのだ。ソラは自分で思う以上に運動音痴で優れた体術を持たず、先程の炎も瞬の様に飛んでかわせないだろう。だとしたら自分には何の取り柄もない。

「時雨教の次期教祖は性格がころころと変わる奴だな」

幸い、今の瞬にソラを殺す気はない様だ。

「ちょっと、あなた時雨ソラがマグゼラにいるって言ったわよね？しもべのくせにわたしを騙したの？神様を裏切ったらどうなるか分かっているの！？」

ナナツツが瞬に向けて木の枝を投げる。枝は瞬のいるところまで届かず、弱弱しく落ちた。

「しーぐーれっ」

瞬はナナツツを無視して、ソラに体を向ける。この言い方は何だ。物凄く苛つく。

「お前さ、俺を殺すつもりならこいつを先に倒した方がいいんじゃないの？」

「は？何でだよ」

ソラは彼の提案を即反対する。

「お前食欲欲しいんだろ？こいつは俺より弱いから、お前が俺を殺すつもりなら、こいつに負けたら駄目だよなあ」

「こいつはあんたが殺すんじゃないのか」

「俺かお前がこいつを殺しても、結果は同じなんだぜ」

ソラは思う。こいつはただ面倒臭いだけで俺に押し付けているんだ。

「ちょっと、わたしを殺す前提で話さないでくれる？」

「ああ、やるなら次期教祖様をやってくれ」

と言って、瞬はソラを自分の前に突き飛ばす。

「こいつが戦ってくれるってよ」

俺はまだ承諾していない。いくらなんでも勝手すぎる。

「次期教祖様は自分は強いって思ってるみたいだ」

「おい」

「ふーん。じゃあ暇つぶしに……」

もう頭に来た。『彼』^{あいつ}から殺ってやる。

「俺が殺すのはあんただ！勝手に決めるな！」

ソラは、『彼』を殺してやるという思いで頭を埋め尽くし、肩に巻きつけていたディバインを振る。

セルシーの時と同じなら、このまま時間がゆっくり流れ、鎖が自分の考えている通りに動く。これには奴も敵わないだろう。

思えば上り野郎の心臓をバナナで貫いてやる。と思っていた。

しかし、

「ん？」

ディバインは普通の鎖の様に瞬の前で落ちた。時間も普通に流れている。

「どうして」

ソラはディバインを拾い上げる。何故、ディバインは時を司らない。この光景は瞬からすれば、大口叩く割には雑魚だなという程度で見られているだろう。

「それは時雨の宝『時を操る黄金鎌』ディバインよね？」

ナナッツは分かっているかの様に言う。

「殺意を向けられたら、時を止めてでも主人を守り抜く。そんな意思を持っている武器なのよ。まさか鎖に繋がれているとは思わなかったけど」

「殺意………？」

「そう。相手が殺意を向けないとそれはただの鎌。自分から殺すときは別の武器に使い慣れないといけないわ。知らなかったの？」

殺意。確かに初めてディバインを使った時は、セルシーが殺意を向けて走ってきた。

当時はそんなこと考えていなかったが、セルシーの顔を傷つけた時なんかは、さらに強い殺意を向けられた。その後はさらに時間が遅くなったような気がする。

要するに『彼』が殺意を向けないとソラは『彼』に勝てない。

「そのディバインを作ったのは、神を信仰し正義感溢れる時雨の先祖たち。彼らは卑怯を憎んだ。だからこの武器を持つ子孫たちが、罪のない民衆を殺さない様な、武器を作ったの」

「卑怯………」

「ましてディバインで不意打ちなんて無理よ。ディバインは、普通の武器として使おうとしても人を斬ることはできない」

ソラの頭の中が真っ白になる。

ディバインはやっとな手に入れた武器だった。鎖を長くして不意打ちでもできたらと考えていた。しかし、

誠実な時雨の先祖たちはそれを許さなかった。

「卑怯こそ全てなのに」

クレデイス教の戦闘隊長であるナナッツがこう言うのは当然だが、今だけソラは卑怯こそ全てという言葉に小さく同意した。

「ディバインのことを分かっている、殺意を向けて時間を止められるのは余程の馬鹿ね」

セルシーは時を止められていた。つまりナナッツが言う馬鹿なのだ。

「じゃあわたしがあなたに殺意を向けなければ、殺される心配はない」

ディバインの痛恨の欠点。それが知られてしまえば終わったも同然。「でもあなたを殺さないといけないのなら、ディバインに殺気を察知される前にやるべきね」

ソラはどうすればいいのかわからなくなって、絶望に満ちた目で瞬を見た。瞬は顔色一つ変えないで日本刀を肩に担いでいる。

「あんたは食料いるんだろ？ だったらあんたが殺せばいいじゃんか」と、ソラは言う。だが、

「俺がこいつを殺して、食料を全部持っていったらお前飢え死にだな」

瞬は平然とした顔をしているが、それはソラ不幸を楽しんでいるようにも見える。

「まあ俺はクレイエルまでの近道を知ってるし、最低食料がなくなつて大丈夫なんだぜ」

「じゃあなんでこの女を殺すとかさっき言ったんだよ」

「そんなの決まってるだろ？ こいつが人間以下のクソだからだ」

ああもう意味不明だ。ルーミイもリリカも瞬も何をしたいのかさっぱり分からない。お前らの望みはなんなんだよ。

「自力で敵を倒せてか……」

ソラはふと思った。今ナナツは殺意を向けない為に黙っている。

このバナナを鎖から外して普通の鎖として使ってみてはどうだろう。鎖は硬いから鞭の代わりでもなるだろう。だがバナナを外したら殺意を向けられる。

それでも鞭なんて使ったことがないのでやはり自信が持てない。もたもたしているとあのドラゴンに焼き尽くされてしまう。何かいい方法はないのか。

例えば武器が使えないという窮地に立ったら瞬は何をするのだろうか。

「おい、あんただったらどうするんだ」

ソラは瞬に尋ねる。

「どうするって？」

「例えばあんたが刀を相手に奪われたらどうするんだ」

「何でそんなこと聞くんだよ。大体奪われる前にぶっ殺せば済む話だろ」

「例えだよ！」

「殴るか蹴るかすればいいだろ」

駄目だ。この男の答えは参考にならない。こいつはクレデイス教を潰す存在。頭の中も戦いで一杯になってる。

「はあ……」

ソラはため息をせざるおえなかった。現在ナナツツはバナナにはめられないように殺意を向けていない。もしソラがバナナを持っていなかったら、殺されていただろう。そう思えばこの状況はまだマシなのかもしれない。

こうなるのだったら瞬よりも殺意を向けていたナナツツにバナナを振ればよかった。ソラは何かをすると絶対後悔しているような気がした。

「俺からすればな、ソラとクソが相打ちになってくれるのが一番ありがたいんだぜ。お前俺の命狙ってんだろ？」

「だからわたしが死ぬ前提で話すのやめてって言わなかったかしら」瞬とナナツツが何か言っている。苛ついているソラの耳には何も聞こえていない。

「ああもう！何なんだよ！」

「？」

「意味が分からない！どうして俺がこんな目に遭うんだ！」

ソラは焦れて鎖鎌を地面に叩きつける。そして地面に座る。もう何をすればいいのか分からない。だから焦れていた。

こんなところで死にたくない。かと言って今の自分に何ができる。戦うことはできない。逃げたら飢え死にする。

格闘術を知らないソラにとって武器はなくてはならないものだ。だ

が、今使える武器はない。

「武器……待てよ？」

ソラは突然立ち上がった瞬間に近付く。

さっきまで絶望の目だったのに期待の目に変わっている。今まで変な奴はたくさん見てきたが、こんな奴は始めてだ。瞬にはこの後ソラが言うことをなんとなく予想できていた。

「その刀貸して」

「これか？言っとくが重いぞ」

確かに瞬の持っている刀は長い。刀身だけでソラの肩ぐらいはある。瞬は平気な顔でそれを軽々と振り回している。

「何でもいいから貸して！終わったら返すから！」

「終わったら、が死ぬって意味だったら？」

「俺はこんなところで死なない！」

ソラの表情を見ると、瞬は笑って刀をくれた。こんなもの使えるのだろうか、という不安だけがソラに残っている。

「重っ！」

刀を手にとった途端、あまりの重さにソラはよろけた。と同時に、身体の中でふと赤い何かを感じた。恐怖心が徐々に消えていく。こんな気分は初めてだ。

「あれ？」

気のせいかな、刀が軽くなっていくように感じる。これくらいの軽さなら振り回すのも簡単だと思えるくらい、軽くなった。

「あんたさ、この刀に魔術かけたのか？」

ソラは瞬を疑う。こんなことできるのはこいつしかない。だが、「魔術？そんなものかけてねえよ。第一俺は魔術は苦手なんだよ」瞬はソラの言うことを否定した。

「じゃあなんでこの刀こんな軽いんだ」

「軽いって……」

「なんか変なんだよ。身体が、おかしい」

「何言ってるんだお前？」

「あいつに勝てそうな、気がする」

「おいおい、自意識過剰か？」

ソラは鎖鎌を肩に巻きつけて、

「絶対、勝てる」

と言った。

「あの刀を軽いつて感じたの俺以外にいたのか？何なんだあいつ・・・」

瞬は小さく驚いている。もちろんソラにもこの理由は分からない。

ソラは微笑を浮かべて刀を手にナナツツの前に進む。もう怖いなんて感じない。

召喚魔術を見た時、あれほど怖気づいたのが嘘の様だ。

「あら、その日本刀でわたしに勝つつもり？無理よ」

ソラは黙って刀を構える。まるで使い慣れている様に。

「クレデイス教・・・俺が潰す！」

ナナツツは突然の変異に驚きを隠せない様子だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1768s/>

M†Hunter

2011年10月7日11時28分発行